

栄町龍角寺出土土偶について

— 1988年度調査出土資料から —

安井 健一、佐布 環 貴*¹、武内 博 志*²

1 はじめに

印旛郡栄町に所在する龍角寺^(註1)は、東日本における初期古代寺院としてよく知られている。そして周辺には東日本最大の方墳である岩屋古墳をはじめとする竜角寺古墳群や、埴生郡衙推定地とされている大畑Ⅰ遺跡など、古墳時代後期から律令期にかけての重要な遺跡が密集している。しかし、その一角に縄文時代の大規模な集落跡が存在することは、一部の地元研究者に知られていただけで実態はほとんど明らかにされていなかった。

1988年に千葉県教育委員会によってこの古代寺院の寺域確認のための学術調査が実施された。その際一部のトレンチがこの縄文時代集落跡に設定され、そこからは中期後葉から後期末にかけての竪穴住居跡をはじめとする遺構群や、調査面積に比して膨大な数の遺物が出土した。しかしながら調査の目的が古代寺院の確認調査であったため、その成果は調査報告書にはほとんど反映されなかった。ただ表採資料も含め総数16点の土偶が出土しており、写真図版の形で掲載された(大原 1989)。土偶の時期は後期から晩期にわたるが、数もさることながら形状など注目すべき内容を含んでいた。下総台地に於ける土偶多量保有遺跡の一つであることを示す重要な成果であったといえる。

この小論は、この時写真図版でしか公表されなかった土偶について改めて図化し再検証を行うとともに、ほとんど公表されなかった土器をはじめとする縄文時代の遺物を公表することによって、縄文時代の集落跡として改めて龍角寺を位置付けようという試みである。ただし扱うべき問題点がかなり多岐にわたるため、今回は土偶の実測図と関連する土器資料の公表を主眼とする。出土資料の比較検証と、遺跡の性格・構造についての考察は機会を改めて行う予定である。(安井)

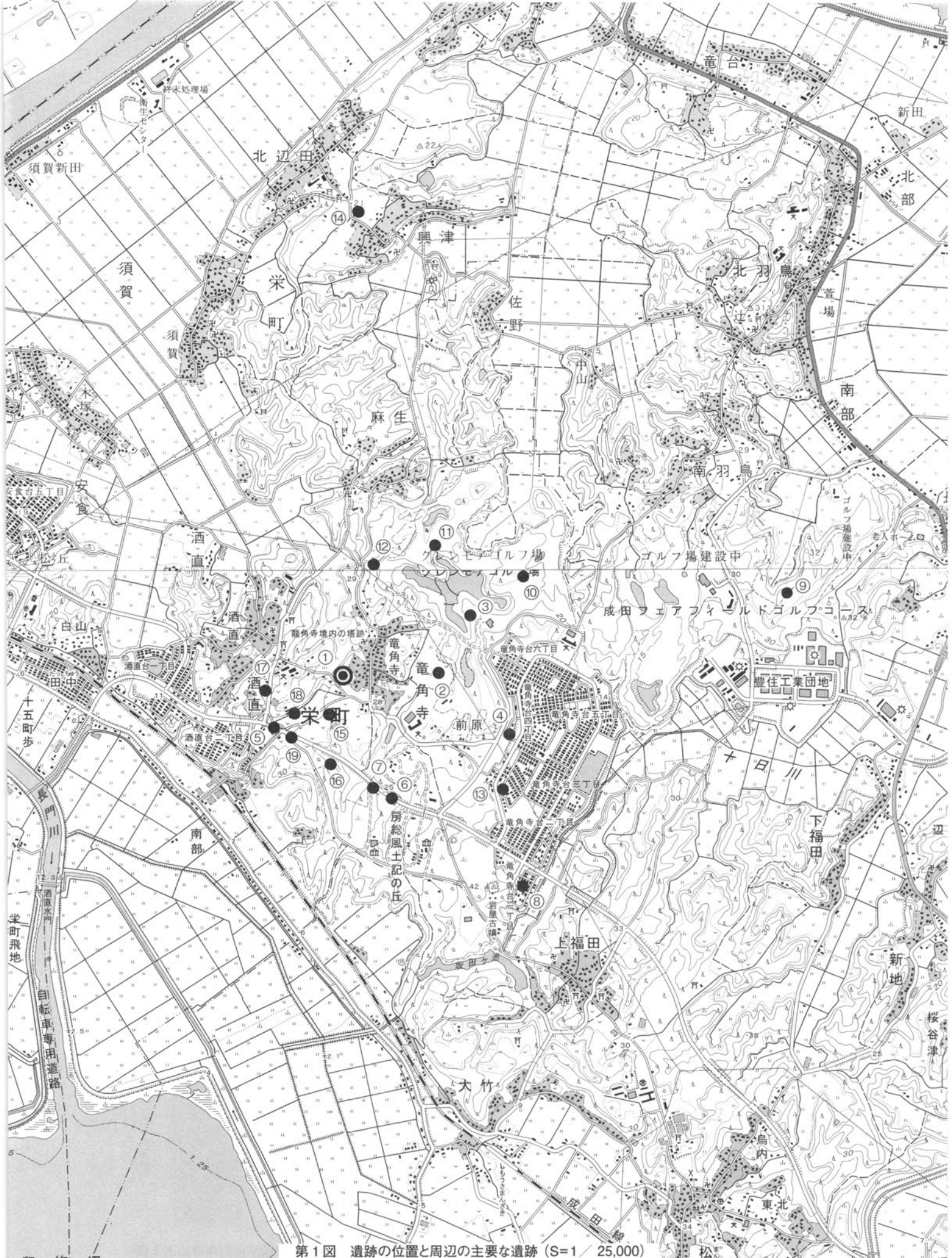
2 龍角寺の立地と周辺遺跡

龍角寺①は利根川に注ぐ小河川によって東西を樹枝状に開析された、幅約250mの舌状台地上に位置する(第1図、丸数字は本文中の遺跡名と対応する)。利根川と印旛沼にはさまれた栄町の下総台地は、それらに注ぐ小支谷によって複雑に開析されており平坦面が少ない。現在寺のある地点は標高約30m前後で周辺の中では最も高く、この周辺では比較的まとまった広さの平坦面内に位置している。しかし東側は谷の浸食も著しく、それ以外にも微妙な起伏があり、地形図で見るほど平坦ではない。寺の南側は住宅が密集しておりその周囲はほとんどが畑地となっている。縄文時代の遺跡地は集落の南西外れの畑地にあたる。遺跡の西北側は谷となっており利根川へ注いでいる。

縄文時代の遺跡は印旛沼周辺、利根川沿岸とも多数存在する。早期では谷を隔てた東側に撚糸文期から条痕文期にかけての遺物が出土した龍角寺谷田川遺跡②、条痕文期の集石が検出された龍角寺尾上遺跡③(以上石戸他 1991)、沈線文系土器が出土した龍角寺ニュータウンNo.3遺跡④(越川他 1982)、同じく条痕文期の炬穴が検出された大畑Ⅰ遺跡⑤、池上りⅠ遺跡⑥、池上りⅡ遺跡⑦(石田・横山他 1985)などが存在する。前期では東側の龍角寺ニュータウンNo.5遺跡⑧から前期後葉の竪穴状遺構が検出されている(越川他 1982)。また、人頭形土製品が出土した南羽鳥中岫第1遺跡⑨が著名である(宇田・松田 1997)。中期では、龍角寺からやせ尾根を経た北側の麻生地区に麻生広ノ台遺跡⑩が存在する。時期は中期中葉から後葉にかけてを主体とし、中央広場を囲むように貯蔵穴群および住居群が環状に構築される拠点集落として位置付けられるものである。周辺には阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期の貯蔵穴と有段住居が環状を呈する麻生天福遺跡

*1 弘前大学人文学部卒業

*2 慶応義塾大学大学院文学研究科修士



第1図 遺跡の位置と周辺の主要な遺跡 (S=1 / 25,000)

⑪、貯蔵穴が検出された龍角寺釜神遺跡⑫などが存在する。残念ながらこれら3遺跡は諸般の事情により正式の報告書が刊行される見込みは立っていない(財団法人印旛郡市文化財センター編 1987・1988・1989・1990)。龍角寺ニュータウンNo.4遺跡⑬では中期末～後期初頭の堅穴住居跡が15軒、土坑212基、埋設土器3基が検出されており、先の麻生広ノ台遺跡に後続する集落遺跡の一つとして注目される(越川他 1982)。今回主題とする龍角寺においても、今のところこの時期より遺構の形成が開始されることが確認されている。後晩期において注目すべきは、利根川沿いの興津地区に存在する大規模な環状集落である中道遺跡(興津貝塚)⑭である。貝層自体は規模の大きいものではないが、いわゆる「環状盛土」が良好に残されている。後述する大野一郎氏の文献にも登場しており古くから存在が知られているものの、成田山霊光館などに出土遺物が多少収蔵されている程度で内容については龍角寺以上に不明な点が多い。2001年に小規模な調査が行われ、後期を中心とした堅穴住居跡や堅穴状遺構、土壇墓などが検出されている(喜多 2003)。龍角寺に戻ってその周辺に目を転じると、遺構は確認できないものの後晩期の縄文土器が出土した遺跡として敷内遺跡⑮(宮 1991)、大畑Ⅰ遺跡⑯(石田・横山他 1985)、大畑Ⅰ-2遺跡⑰(小林 1985)、大畑Ⅰ-3遺跡⑱(小林他 1994)、大畑Ⅱ遺跡⑲(米田他 1987)、宮前遺跡⑳(吉林 2003)などが存在する。特に大畑Ⅰ-2遺跡では晩期終末の荒海式から弥生時代にかけての土器が出土している。その他地区の外になるが荒海貝塚、台方花輪貝塚、殿台遺跡、荒海川表遺跡など重要な遺跡が多数存在しており、縄文時代後晩期から弥生時代にかけて拠点的な地位を占める地域であると言える。(安井)

3 縄文遺跡としての龍角寺の沿革

古墳時代以降の龍角寺とその周辺については改めて触れるまでもないため、ここでは縄文時代の龍角寺について説明する。

龍角寺が縄文時代の遺跡として認識されるのは、管見に触れる限りでは1926年の大野一郎氏による地名表が最初である(大野 1926)。「印旛郡八生(やぶ)村大字龍角寺 偶然 磨石斧」と記載されている。「偶然」の意味するところは不明だが、表面採集といったニュアンスであろうか。もちろんこれでは遺跡の性格は全く分からず、特に調査が行われたわけではないよ

うである。

それから2年後の1928年に刊行された地名表(東京帝国大学 1928)では、「印旛郡八生村龍角寺 土器・土偶・磨石斧 大野一郎 二16-3」とある。出土遺物の記載がより具体的になっており、ある程度名の通った研究者による来訪ないし調査の手が加えられたか、あるいは出土品がそうした人たちの目に触れる機会があった可能性を示している(文中の「二16-3」とは考古学雑誌16-3を意味し、先述した大野一郎氏の地名表を示す)。この辺の事情についても全く記録が残されていないが、この時点で少なくとも土偶の出土が顕著であることは認識されていたと推察される。ちなみに、龍角寺と聞いて極めて著名な1点の土偶を連想される方もいるかもしれない。兵庫県西宮市に所在する財団法人辰馬考古資料館には、龍角寺から出土したと言われる1点の土偶が所蔵されている(写真)。滋賀県長浜市に所在する下郷鐘秀館にかつて所蔵されていたもので、古くはこの下郷鐘秀館によって編纂された『鐘秀館蔵日本石器時代土器選集』(註2)にも収録されており、江坂輝彌氏による『土偶(江坂 1960)(註3)』や野口義麿氏編集による『日本原始美術2 土偶・装身具』(野口他 1964)など、その引用数は数限りない。この下郷鐘秀館の資料は明治期から大正期にかけて各地で収集活動を積極的に行っていた歯科医高島



写真 辰馬考古資料館所蔵龍角寺出土土偶

多米治氏の所蔵品を主体とするが、高島氏が龍角寺を来訪もしくは調査した記録は管見に触れる限り残されていない。高島氏に近い関係にあった収集家たちによる採取などの可能性も考えられるが、現在のところ出土自体の真偽も含め不明な点が多い。とは言えこの土偶が縄文時代の遺跡としての龍角寺の名を知らしめていた唯一の存在であったことは間違いなく、その点で重要な資料であることは言うまでもない。この土偶については現在調査中であり、近いうちに報告する予定である。

その後調査の手が加わることがなかったこの遺跡に初めて学術的な光が当てられるのは、先述した1988年の重要遺跡古代寺院跡の確認調査である。詳しい内容については後述するが、この遺跡の価値を垣間見せた重要な調査であった。調査の目的上、公表された成果の大部分は古墳時代以降のものであったことは言うまでもないが、出土した遺物の大多数は縄文土器であり、調査面積を考えると膨大な量であった。報告書においても縄文時代の遺物を多出したエリアについて、「圧倒的に縄文時代中期から晩期の遺跡で、後期を主体とするが土偶の多出など注目すべき遺跡といえよう」と、その重要性を指摘している。

2000年には遺跡内に存在する青年館の改築に伴って(財)印旛郡市文化財センターによって調査が行われ、中期から晩期にかけての竪穴住居跡6軒、土坑4基が検出された(中山・喜多 2006)。特に晩期前半の竪穴住居跡からイノシシ形土製品が出土したことが注目される。土偶も破片ではあるが竪穴住居跡から2点、グリッドから1点出土した。

その青年館の西側約50mに、1986年の埴生郡衙跡確認調査時に12地点としてトレンチが設定された場所がある(大野 1987)。台地西側の谷に沿った地点で現況は畑地となっている。5m四方のトレンチ3箇所あわせて75㎡の調査を行い、古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡4軒がベタ一面に検出されているが、縄文土器も後期を中心にかなりの量が出土したということである。状況を考えると縄文時代の遺構は仮に存在したとしても破壊された可能性が強いが、「付近に縄文時代後期の住居跡の存在が予想される」という出土状況であったわけで、集落跡の範囲を示唆する所見として注意すべきであろう。

以上3カ所の調査地点を第2図に示しておいた。小さな谷を取り囲むように各調査区が位置しているのが分かる。()内は調査当時の遺跡名であるが、いずれ

も古墳時代以降の遺跡としての認識のもとに付けられた名称で、縄文時代の遺跡としては同一のものともみなして差し支えないと思われる。

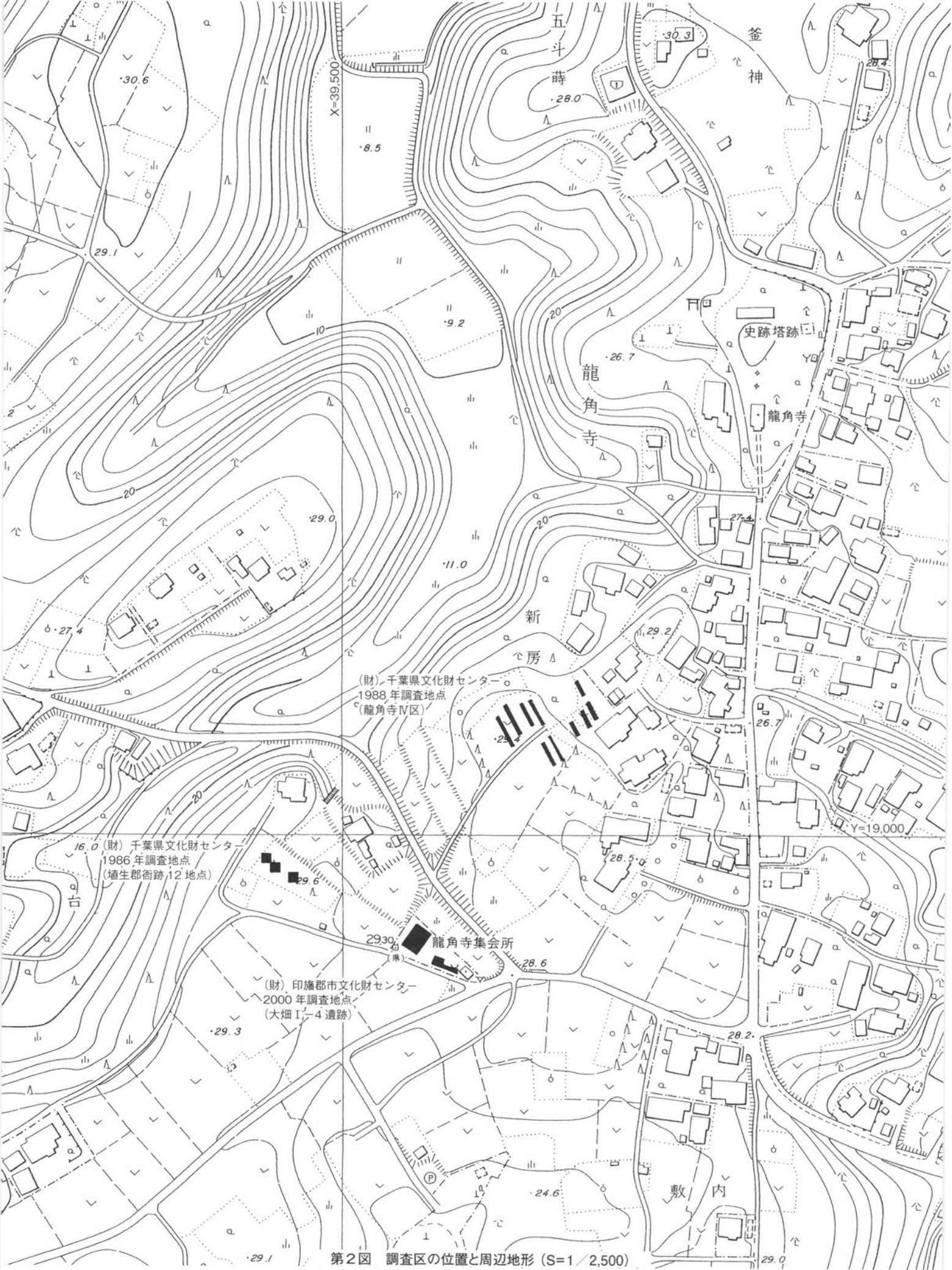
なお、1997年度に刊行された千葉県教育委員会による改訂版千葉県埋蔵文化財分布地図(1)においては、寺院本体とは別にこのエリアの小字名をつけて「竜角寺新房遺跡」としている。先の1986年および2000年調査地点は小字名が大畑になるが、縄文時代の遺跡範囲を示す名称としては現段階では最も適切であろうと思われる。以下、小論ではこの名称を使用する。(安井)

4 1988年調査の概要

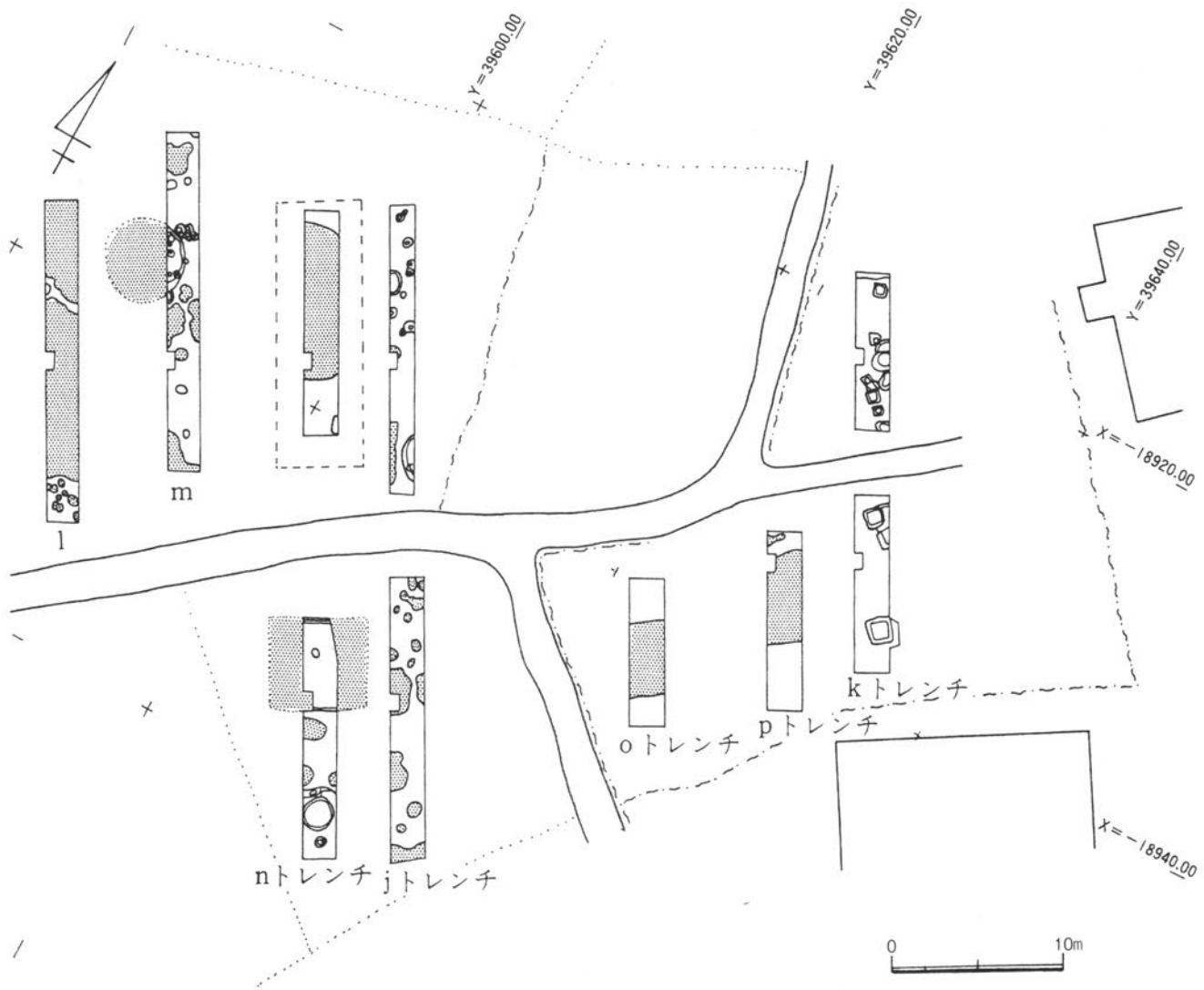
この調査は、千葉県内に存在する約40箇所の古代寺院のうち特に重要な寺院の規模や時代を解明しその保存策を講じる資料とする目的で、千葉県教育委員会の手によって国庫補助事業として行われたものである。実際には教育委員会から委託を受けた財団法人千葉県文化財センターによって実施された。古代寺院としての龍角寺は古くから著名であり、発掘調査もたびたび行われてきた。そのため1988年の調査では現在残る寺院境内は調査対象とせず、周辺地域において寺域の限界を確認すること、関連施設の存在を探ることを主目的とした。ただし周辺は人家が密集しており作物が耕作されている畑も当然避ける必要があったため、トレンチの設定にはかなり制約が多かったようである。全体では大きく分けて5カ所に調査区が設定され、そのうち竜角寺集落の南西側がIV区と呼称され縄文時代の遺物が濃密に散布していた。その他の調査区でも縄文土器の出土はみられたが、遺構は検出されなかった。ここではそのIV区について概要を記す。

IV区では1.5～2m幅のトレンチを全部で10本、面積にして275㎡分設定した。トレンチ全体の位置関係は第3図の通りである。第4・5図は報告書の平面図を基に、新たに出土位置が判明した遺物のドットを追加したものである。空白が多くやや間延びした印象があるが、これはトレンチの位置関係を崩さずに図化したためである。

調査区の北西側が谷となっており、谷と平行するように南南西から北北東に向かって道路が通じている。この谷および道路に直交するように、北々西から東南東向きにトレンチを設定した。トレンチは南西から北東に向かって順にL、m、n、j、o、p、kとアルファベットで呼称され、各トレンチは南東から5mごとに1、2、…と小グリッドで区画されている(註4)。



第2図 調査区の位置と周辺地形 (S=1/2,500)



第3図 調査区トレンチ配置 (S=1/400)

n、j、kの各トレンチは中間に道路をはさむためその部分は調査していないが、グリッド番号は通して振られている。第4図は道路北西の谷側、第5図は南東側のトレンチ平面図である。

遺跡の現況について簡単に記すと、調査地を横切る道路沿いから南南西の青年館に向かって土器片が多量に散布している。周囲は比較的平坦であるがこの土器散布地は帯状に盛り上がった状況になっていて、いわゆる「盛土」状を呈している。トレンチはこの「盛土」を横断するように設定された。この「盛土」についての検証は機会を改めて行いたいと思う。

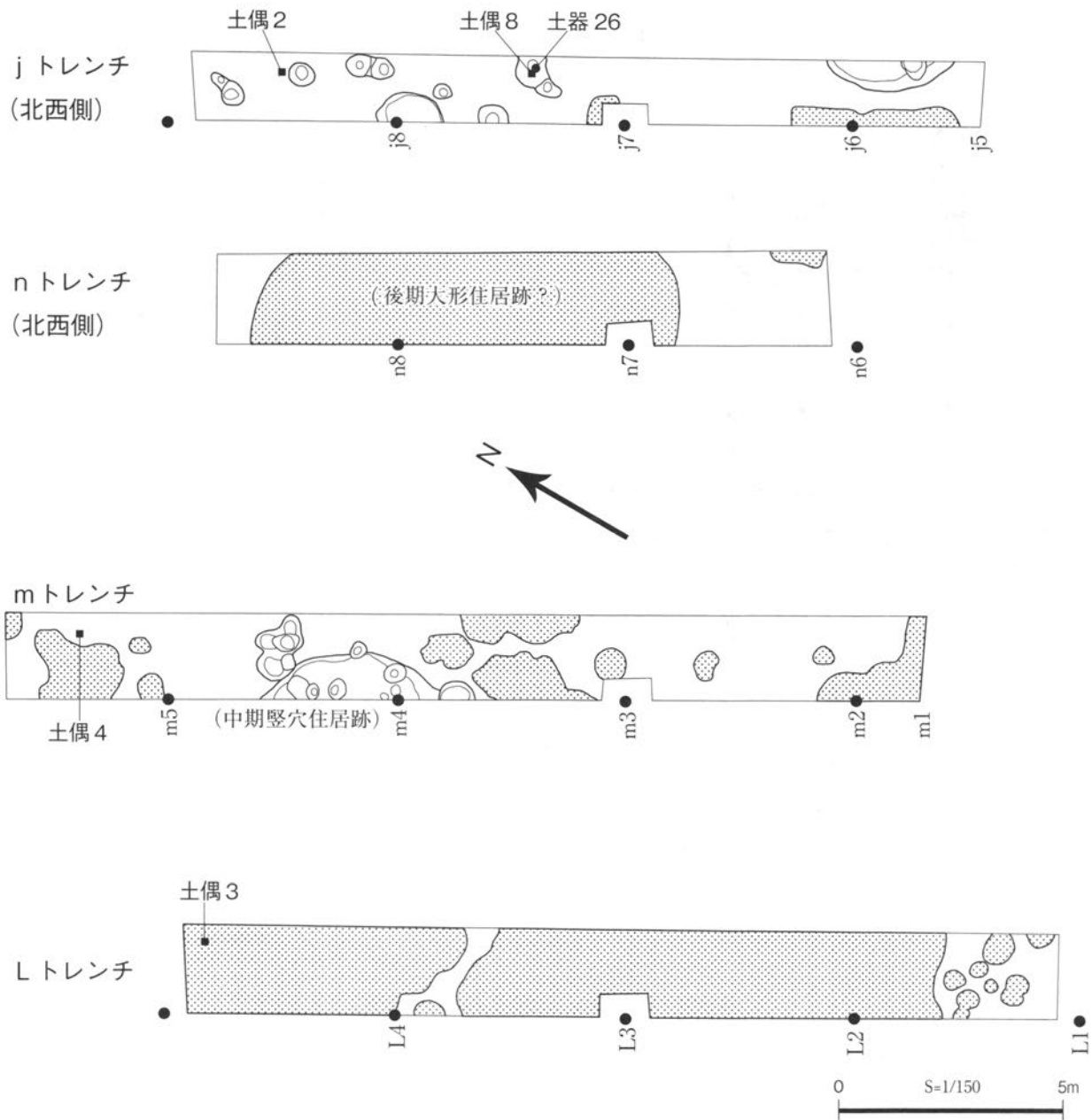
以下、トレンチごとに概要を記す。

<lトレンチ>規模は2×19mで、ほぼ全体が遺構であった。プランを検出した段階で調査を中止したため時期や性格は不明であるが、縄文時代中後期の竪穴住居跡や土坑である可能性が強いとしている。北端のL4グリッドから山形土偶が1点出土した。

<mトレンチ>規模は2×20mで、やはり遺構が濃密に分布していた。ただし地表面から確認面まで30cm程度と薄く、多くの遺構が削平されたと考えられる。中央付近では土器が埋設された竪穴住居跡が検出され、これは全掘調査を行った。時期は中期後葉加曾利E式である。北端のm5グリッドから山形土偶が1点出土した。

<nトレンチ>1.8×14mと2×13.5mの南北2本のトレンチからなり、間は道路で10mほど離れている。やはり全体に遺構が分布しており、南東側トレンチで古代の竪穴住居跡が検出された他はほとんど縄文時代のもと思われる。特に北西端からは直径10m弱、深さ40cm程度の円形プランの遺構を検出した。遺物は縄文後期が多く、大形住居跡の可能性を示していると報告されている。南東側トレンチのn1・n2の各グリッドから土偶の脚部がそれぞれ1点ずつ出土した。

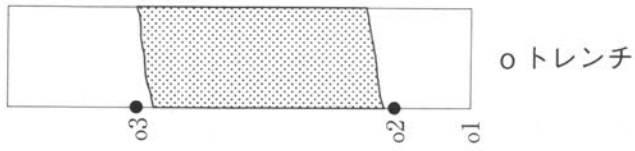
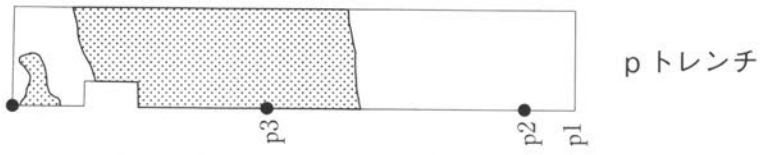
<jトレンチ>IV区のとレンチでは最も長い。ただ



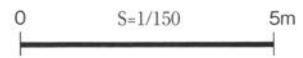
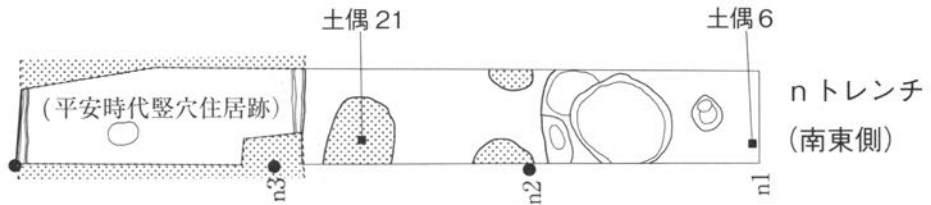
第4図 トレンチ平面図(1)

し中間部を道路が横切するため間は5mほど離れており、2×17mと1.5×17.5mの2本のトレンチからなる。遺構は全体に多く、また、遺物も極めて多量に出土した。道路の南東側トレンチからは多くの遺構が検出されたほか、晩期を中心とした遺物が多量に出土した。地表面から確認面まで約65cmと厚いが遺存状況はあまり良くなく、部分的に攪乱されたような状況を呈していた。土層は現場のメモおよび写真から模式的に図示した。j 4グリッド下部から晩期土偶が出土しているが、プライマリーな状況を保っているかは疑問が残る。同じj 4グリッドからみみずく土偶の胴部が出土したほか、j 3グリッドから脚部が出土した。北西側のトレンチでは、j 7・j 8グリッドで直径40～

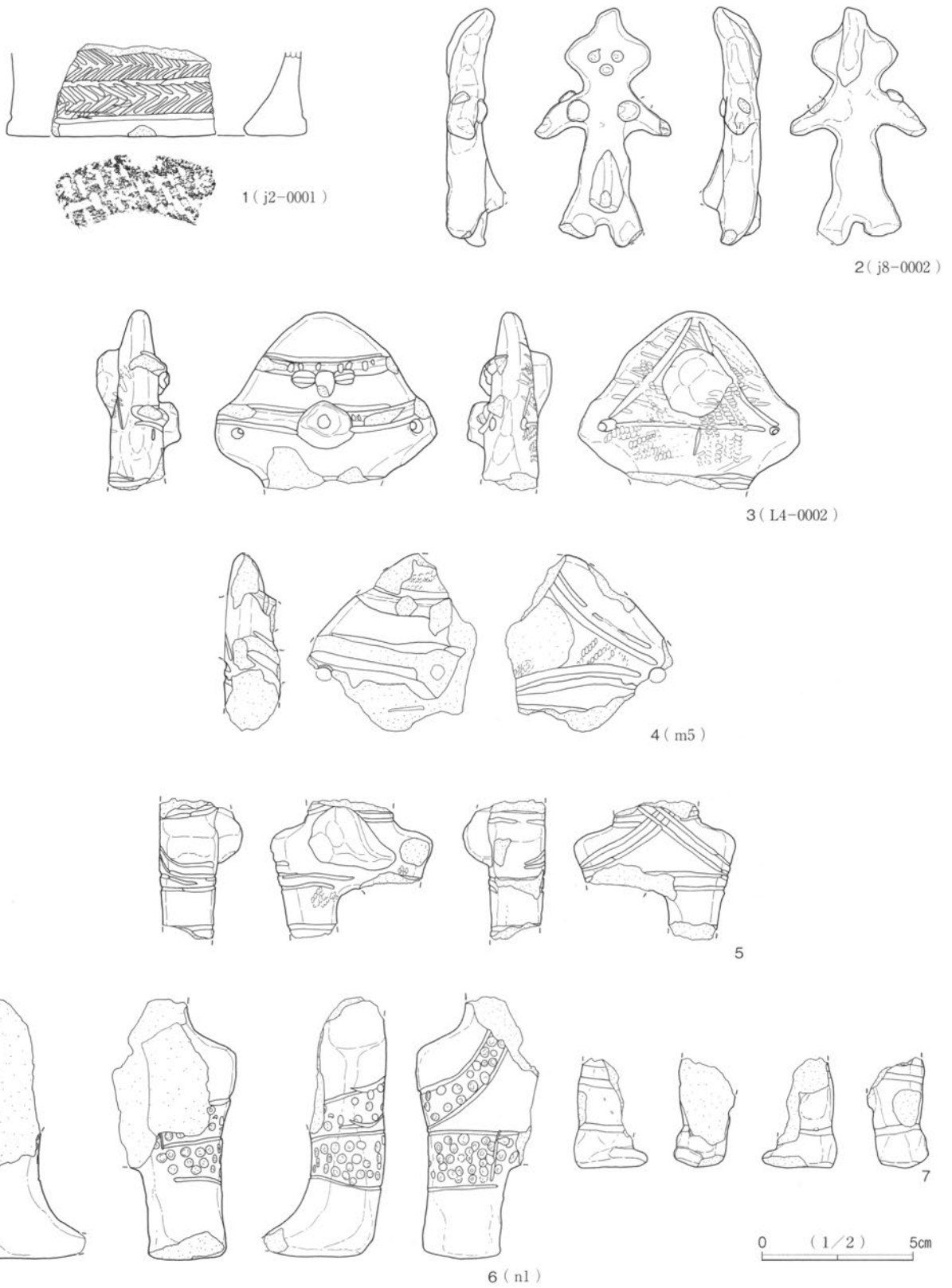
60cmのピットが7基と直径1.5mの土坑1基が円弧を描くように検出され、そのうち土坑とピット6基を調査した。先のn トレンチ北端の円形プランに重なるような位置であり、竪穴住居跡の可能性はある。地山はほぼ平坦であったがハードローム層が露出した状況であった。包含層の残りは悪かったが、全体にロームブロックが多量に混入しており人為堆積の可能性を示していた。j 7グリッドに所在するピットのうち1基から安行1式期の台付浅鉢とともにみみずく土偶の頭部が出土した。また、小形の山形土偶がピット間の地山直上から出土している。道路寄りのj 5・6グリッドからは竪穴状の遺構が検出された。現場の所見では後期末とされている。なお、地山のハードローム上面は



j4区北側土層模式図



第5図 トレンチ平面図 (2)



第6图 出土土偶实测图(1)

北側と南側とで高低差があり、北西側が高く南東側が低い自然窪地である可能性が推測できる。

< o・p トレンチ > 両トレンチを横断するように溝状遺構が検出されたが中世以降の所産と考えられる。縄文時代の遺物も量が少なくなる。

< k トレンチ > 竜角寺集落に最も近接したトレンチである。近世の土壙墓が検出され、墓域であったと考えられる。削平著しく縄文時代の遺構は検出されず遺物も少なかった。このトレンチについては今回平面図を掲載していない。(安井)

5 出土した土偶

出土した土偶は全部で22点である(第6～8図)。そのうち調査時に出土したもので報告書に掲載されたものが11点、表採品で報告書に掲載されたもの4点(以上2～6・8・9・12～15・17・18・21・22)、再整理段階で新たに確認したもの5点(1・7・16・19・20)、渡辺新氏による表面採集品1点(11)、安井健一表面採集品1点(10)である。なお、報告書に掲載されたもののうち、1点は土器であろうと判断したためここでは除外した。報告書では2・3・4・8・12の出土位置が明示されているが、6と21は現場図面で出土位置が確認できるので今回新たに明示した。また9は現場図面に記録がないが、12のすぐ近くから出土したという調査時の所見からj4区出土とした。1・16・20・22はポイントまでは分からないが、注記により出土グリッドが判明したものである。

1はj2グリッド出土である。筒形土偶の底面部残欠と思われる。現存で高さ2.7cm、幅5.5cm、厚さ2.1cm、重さ28.8gを測り、推定直径は約10cmである。底面は比較的大きく開口している。文様は、横位の沈線区画内に綾杉文が施され、図上左端に小さな刺突が2つ確認できる。刺突は綾杉文を切る。底面には網代痕が認められる。色調は橙色を呈し、内面は横位のケズリで調整される。底面の開口部分も比較的良好に整形されている。焼成は良好で、胎土には細かな砂粒とスコリアを含む。

2はj8グリッド出土である。ほぼ完形の山形土偶で、現存高7.9cm、幅4.5cm、厚さ1.9cm、重さ29.7gを測る。頭部形態は凸形を呈し、目口は竹管状工具による刺突で表現される。山形土偶に特有の眉や顎の表現はなく、後頭部には粘土貼付けによる縦長の隆起が認められる。乳房は円形の粘土粒を貼付けて表現し、同様の粘土粒が肩にも貼付けられるが、左肩のものは剥

落している。腹部は前方に隆起するが先端が欠損する。手足の先端は若干窪むが、左腕には粘土のつなぎ目が観察できる。左右の脚部とも先端が欠損するが、左足部の残存部分の形態から、完形であっても自立は不可能であることがわかる。色調は黒褐色で、左腕の先端は明赤褐色を呈する。全体にナデによる調整がなされ、焼成は良好である。胎土には砂粒を密に含む。

3はL4グリッド出土である。山形土偶の頭部残欠である。現存で高さ5.4cm、幅6.7cm、厚さ2.8cm、重さ74.1gを測る。顔面は、横位の隆帯で眉を表現し、隆帯にかかるように目・鼻の粘土粒を貼付ける。目の粘土粒上には、横位の沈線が施される。顎は横位の隆帯で表現され、その上にボタン状の粘土を貼付け、口を形作る。口の隆起上は窪み、中央にはやや深い刺突が施される。耳は貫通する円孔で表現される。眉の隆帯上には円形の刻みが施され、同様の刻みが顎の隆帯上にも僅かに確認できる。後頭部は、円形の瘤が貼付けられ、斜位の薄く浅い沈線を数条施した後に、1条の沈線で三角形のモチーフを描き、その後LR縄文が施される。首部にも2条の沈線が僅かに残存する。首部の欠損面には粘土の接合痕が観察され、頭部が少なくとも2つの粘土塊をつなぎ合わせて作られていることがわかる。色調は黒褐色を基調とし、調整はミガキ、焼成は良好である。胎土には砂粒を密に含む。

4はm5グリッド出土である。山形土偶の頭部残欠である。現存で高さ5.9cm、幅5.6cm、厚さ1.9cm、重さ48.7gを測る。全体に摩滅している箇所が多い。顔面は、横位の隆帯で眉が表現され、中央部分には鼻の表現と思われる隆起が存在するが、欠損している。鼻のすぐ脇には僅かに色調が変化している部分があり、粘土粒の貼付けによる右目の可能性があるが、図示していない。口は粘土貼付けと中央の刺突で表現されるが、大半は欠損する。隆帯で顎が表現されるが欠損している。耳は貫通する円孔で表現される。眉の隆帯上方には横位の沈線が施され、額にあたる部分にはLR縄文が施される。顎の隆帯の上下にも沈線が見られる。後頭部には粘土の剥離痕が円形に認められ、本来は隆起していたことがわかる。文様はLR縄文を施文後、2条一組の沈線で三角形のモチーフを描く。首部の断面付近にも沈線が僅かに確認できる。色調はにぶい黄褐色を基調とし、後頭部は橙色を呈する。ミガキで調整され、焼成は良好である。胎土には砂粒を密に含む。

5は出土地点不明である。山形土偶の胴下半から脚

部の残欠である。現存で高さ4.7cm、幅5.4cm、厚さ2.7cm、重さ47.8gを測る。腹部がくびれ、腰部が外に張り出す形態を呈する。腹部は粘土貼付けによって隆起するが、斜位にねじれる様な形態で、隆起の上下に2条一組の沈線が横位に施される。右脚の残存部にも1条の沈線が見られ、わずかにLR縄文が確認できる。背面は2条一組の沈線が斜位に交差するように施され、横位の沈線を切っている。背面にもわずかに縄文が施された痕跡が確認できるが、全体に縦位のケズリ調整がなされ明確ではない。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には細かな砂粒を密に含む。

6はn1グリッド出土である。山形土偶の腰部から左脚部の残欠である。現存で高さ8.6cm、幅4.1cm、厚さ4.1cm、重さ88.9gを測る。腰部が外に張り出す形態を呈し、つま先は前方に突出する。腹部には粘土の剥離痕がみられ、本来は腹部が隆起していたと思われる。股側の面は粘土をケズリ出すように作出される。文様は、2条の沈線で区画帯を作り、その内部に竹管状工具による多数の刺突を施す。背面と前面の股部分に細い縦位の沈線が見られ、欠損する右脚と合わせ、股部を囲うようないわゆるパンツ状文を呈していた可能性がある。足裏面は平坦なものやや丸みを持っており、現存では自立しない。色調は黒褐色を基調とする。調整はミガキ。焼成は良好で、胎土には細かな砂粒を密に含む。

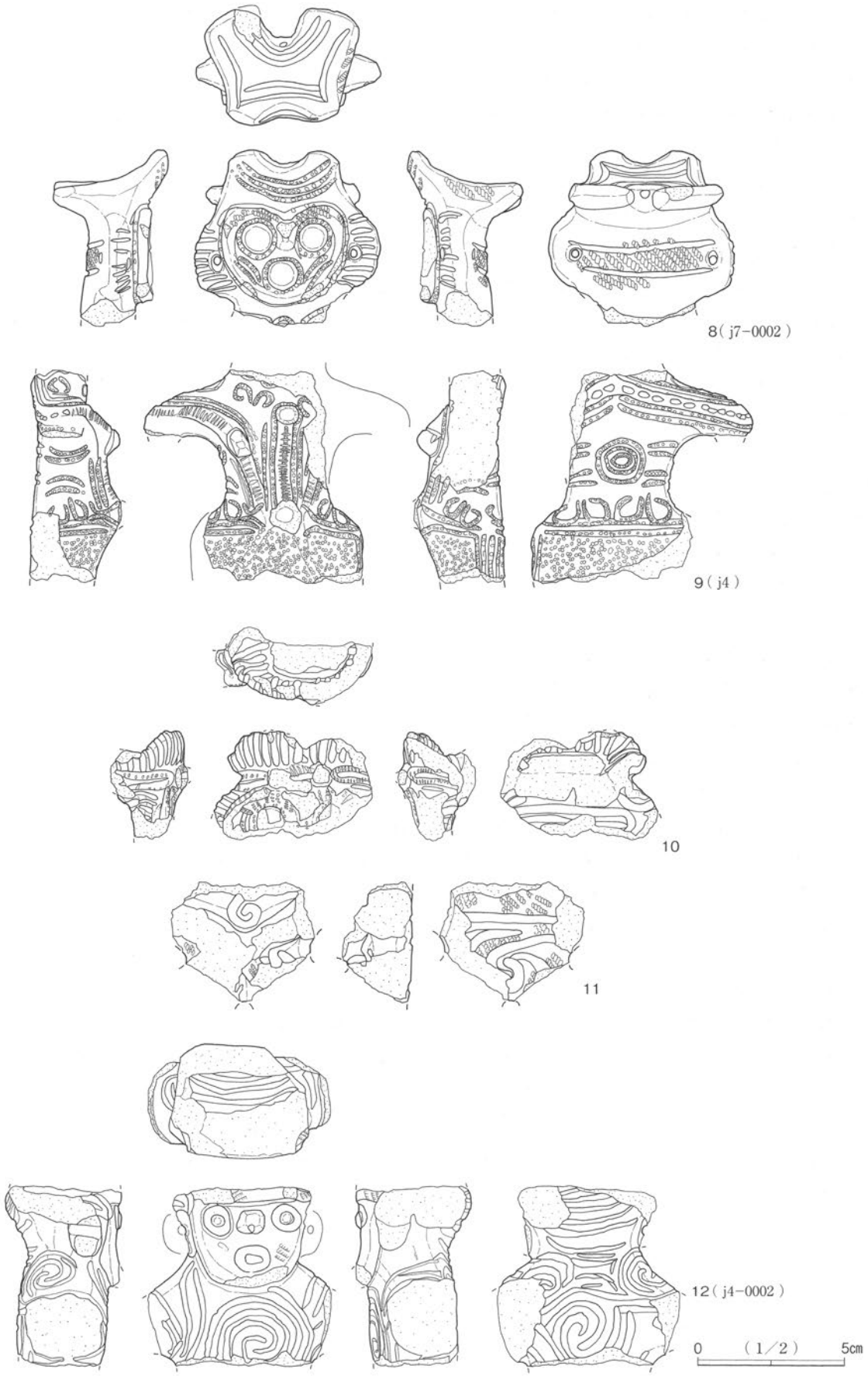
7は出土地点不明である。山形土偶の右脚残欠で、現存高3.6cm、幅2.0cm、厚さ2.5cm、重さ14.5gを測る。脚部下端に粘土を貼付けてつま先を形作り、足裏面は一部欠損するが凹凸のあるやや丸みを帯びた形態となる。文様は横位の沈線のみが確認できる。色調は橙色。ナデにより調整され、爪の痕と思われる小さなスジが多く見られる。焼成は良好で、胎土には非常に細かな砂粒を均質に含む。

8はj7グリッドのピット出土である。みみずく土偶の頭部残欠である。現存で高さ6.0cm、幅6.3cm、厚さ3.9cm、重さ86.6gを測る。顔面部は隆帯をハート形に貼付け、顔の輪郭・眉・鼻としている。目と口は円形の粘土板の上に丸い窪みをつけている。目と口の隆起部は無文で、周りを沈線で囲み、刺突列を加えたものによって縁取っている。同様の手法は頬に施される2条の沈線文、顔面上部に施される3条の沈線文、顔を縁取る外周の沈線と首の文様にも用いられている。頭頂部は平坦で緩やかに前方へ反りあがる。前後で2つに分かれ「H」字型の頭頂部突起となってい

る。平坦部には縁に沿う沈線が左右に1条、前後に2条施される。背面側の2つの突起の間には6mmの深さを測る刺突がある。後頭部は2本の平行沈線施文後にLR縄文を転がしている。縄文は顔面の眉上にも見られる。色調は黒褐色で、赤彩が口・目・前頭部・頭頂部に残る。胎土には石英や砂粒を密に含み、焼成は良好である。

9はj4グリッド出土である。みみずく土偶胴部の残欠である。現存で高さ7.3cm、幅7.5cm、厚さ3.1cm、重さ104.2gを測る。右肩から左の腰にかけて残存する。両肩は左右に強く張り出すが、腰はあまり張らずに脚部に続く。腰のくびれがなく、寸胴形をしている。正面側には臍部の高まりを中心に肩に向けて斜め上方に伸びる隆帯、正中線、足への隆起がつながっている。斜め上方へ伸びる隆帯には粘土粒による乳房がつき、後背面へつながる。臍部と正中線の上部にみられる円形の貼付文は上面が削れている。臍部から伸びる隆帯に施されている刻み、背面の隆帯上の点列状文以外の文様は、すべて8の土偶にも用いられている沈線内に刺突列をいれて描く方法によって付けられている。特徴的な文様では、「し」を線対称に組み合わせて作るもので、胸部に2組、腰回りに4組、首部にも1組みられる。これは8の首部文様にも共通するモチーフである。埼玉県雅楽谷遺跡に類例が見られる。背面の文様は、三重の同心円と左右に2本一對の短い横方向の沈線文が施される。同心円文と沈線内刺突の施文方法は後期安行期のみみずく土偶によく見られる。腰の区画内は先端が鋭く尖る工具による刺突で充填されている。このことから縄文を充填に用いている8とは別個体であると考えられる。色調はにぶい褐色で、丁寧なミガキによって仕上げている。赤彩の痕跡が胸部と右腰部に残る。成形後ナデてから施文を行なっている。焼成は良好である。胎土には白い砂粒を含む。

10は表採資料で、採集地点はnトレンチの北側約5mである。みみずく土偶の頭部残欠である。現存で高さ3.7cm、幅5.3cm、厚さ2.7cm、重さ31.4gを測る。全体に摩耗し、突起や隆帯の剥落が著しい。ハート形の顔面であったと考えられるが、鼻と左眉の隆帯を欠損している。この隆帯上には細かい刻み文が付けられる。目は丸くボタン状の貼付けで、周囲を沈線内刺突文で囲んでいたと考えられる。頭頂部の突起は上方に伸びるものと後頭部側に突き出るものであったようだが、剥落しているため詳細は不明である。後頭部には沈線文が施される。色調は黒褐色で、焼成は良好であ



第7图 出土土偶实测图(2)

る。胎土には細かい砂粒が密に混入する。

11は表採資料で、採集地点はIV区より南側約100m、(財)印旛郡市文化財センター2000年調査地点より北東側約30mの畑である。みみずく土偶の胴部残欠である。現存で高さ4.1cm、幅4.8cm、厚さ2.4cm、重さ39.4gを測る。両腕部と脚部に伸びる隆帯の中心部で、四肢が欠損している。腰のくびれは極端に狭く、くびれからすぐに四肢へと連結する。首への連結、股の残存部も一部確認できるので、二頭身のみみずく土偶だと考えられる。胸部に渦巻き文、扁平な背面には入り組み文が施文される。地文にRL縄文を施し、沈線文を施文する。隆帯の上部を欠損する。色調は褐灰色から黒褐色を呈し、赤彩の痕跡は見られない。胎土に長石・黒雲母・砂粒が混入するが緻密である。焼成は非常に良い。

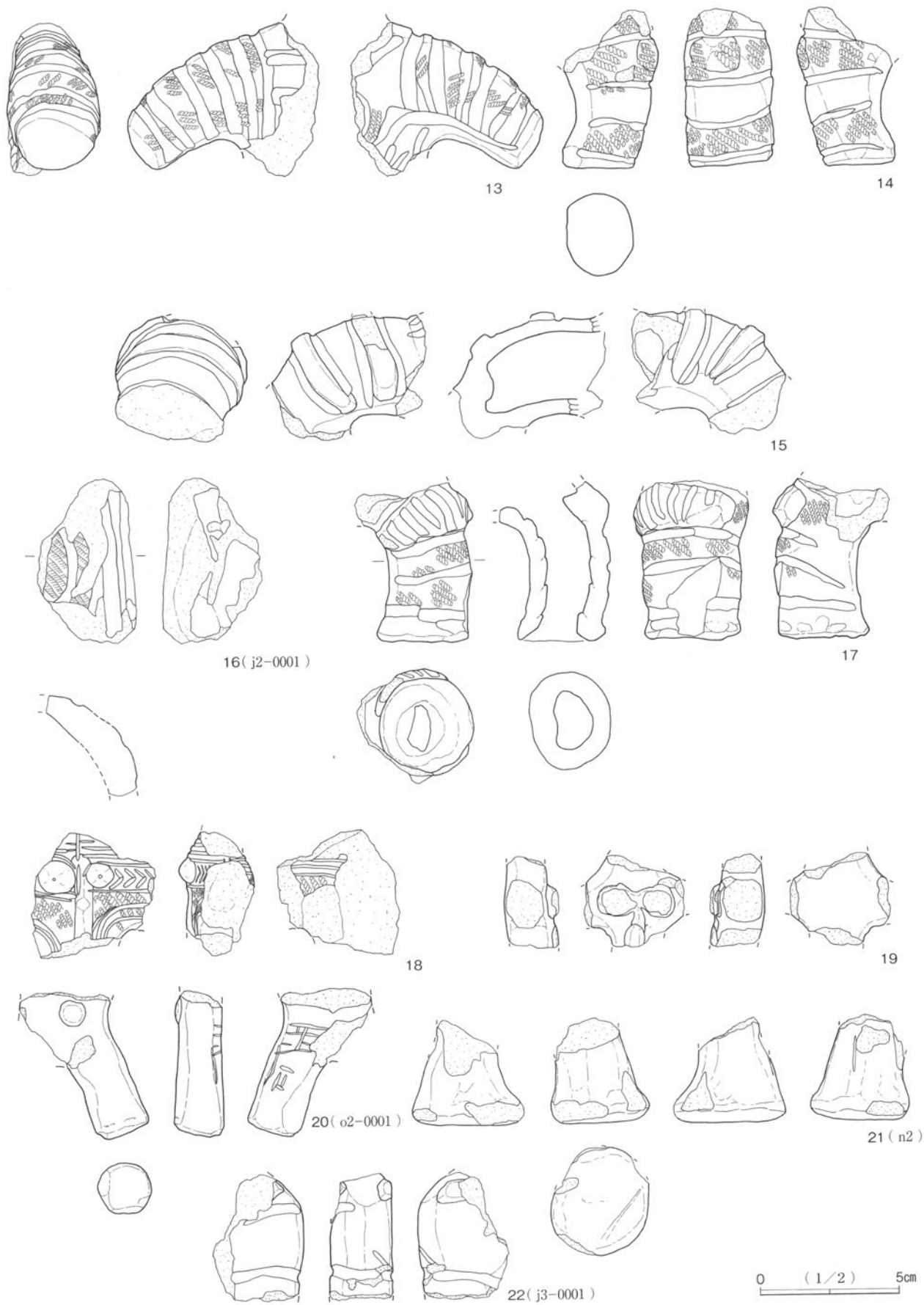
12はj4グリッド出土である。みみずく土偶の上半身の残欠である。両腕と腹部下半を欠損する。現存で高さ6.2cm、幅6.2cm、厚さ3.9cm、重さ140.9gを測る。頭部は板状ではなく、胴部よりも厚みをもつ。頭頂部が平坦で、緩やかに弧を描く平行沈線文が施されている。突起様の頭部装飾の剥がれた痕跡がある。顔面は輪郭となる隆帯で縁取り、胴よりも一段高くしている。表情は粘土粒の貼付けによるそれぞれ独立した目・鼻・口で表現されている。顔面上部の隆帯と左の頬に無節L縄文が施文される。両耳は欠損している。左耳は貼付けの根元からの欠損だが、右耳が先端部の欠損であるため、貫通孔を有する耳であったことが窺える。胴体はずんぐりと丸みをもち、胸部には乳房が無い。また隆帯による胴体への装飾が見られない。文様は入り組み沈線文が渦を巻くモチーフで、正面に大きく1箇所、背面側に3箇所配置されている。頭頂部の剥離痕は顔面側、後頭部側、耳側の4箇所にある。耳側の剥落は左右に突き出たものであったようだが、突起にかぶるように耳部の貼付けが行なわれているので、それほど大きく突出しないだろう。顔面側と後頭部側の剥離面には色調の違いが見られ、後頭部側は外面同様にいぶい褐色を呈するのに対し、顔面側は灰色を帯び、腕部の剥離痕と同色をしめす。これは顔面側の頭頂部突起がある程度大きいものであったことを推測させる。また、頭頂部に沈線文を施文することから、遮光器土偶のような王冠状の隆帯が架けられるものではない。そのため8や10のようにみみずく土偶に特有な頭部形態をもつと考えられる。以上から、この土偶は頭部表現のみみずく土偶だが、体部にはみみずく土

偶の特徴が見られないことがわかる。入り組み文様や渦巻き文が、遮光器土偶を模倣した関東地方の土偶に頻りに施される文様であることから、みみずく土偶が遮光器土偶の影響を受けて、変化している段階の土偶であるといえるかもしれない。色調はいぶい褐色で黒褐色の焼成斑が入る。赤彩の痕跡が広範に確認でき、それは頭頂部、右腕部の欠損面にも及んでいる。調整は沈線文施文後にミガキをかけている。焼成は良好である。胎土に石英や砂粒を含んでいる。

13は出土地点不明である。中実土偶の右腕部残欠である。現存で高さ5.6cm、幅6.9cm、厚さ3.4cm、重さ110.9gを測る。平らな面を背面とした。腕に平行沈線文が6条施文され、背面では脇に沿う沈線文が伸びる。背面に円文か入り組み文の残存部と見られる曲線が残る。いずれの沈線も幅広で浅い。沈線施文後にLR縄文を施文するが、摩耗によって消えかけている部分が多い。脇にはヘラによる調整痕が見られる。みみずく土偶と断言はできない土偶である。大型の個体であることや腕部の先まで施文がなされることから異地域の影響を受けた土偶かもしれない。色調はいぶい赤褐色である。焼成は内部に生焼け状態が見られ、あまり良くない。胎土には石英や砂粒が密に混じる。

14は出土地点不明である。中実土偶の脚部残欠である。現存で高さ5.7cm、幅3.5cm、厚さ3.2cm、重さ61.4gを測る。背面側にかかとの作出が見られたため左脚部とした。欠損面が滑らかなことから腰部分との接合面で欠損していることがわかる。側面にわずかな隆起がみられる。横方向に4条の沈線が施文され、その後RL縄文を施文している。内股は縦にナデしており、足の裏や無文部にヘラの痕跡がある。色調は灰褐色で、一部に赤彩が残る。焼成は非常に良い。胎土に石英、砂粒を含む。

15は出土地点不明である。中空土偶の腕部残欠である。現存で高さ4.5cm、幅5.6cm、厚さ4.7cm、重さ64.2gを測る。表裏は不明だが、首部付近に文様のある方を正面として図面をとった。中空の作りで内面は丁寧なナデ調整が行われている為、輪積みの痕跡はほとんど分からない。内部先端のみ粘土塊が残るような粗い調整が残る。腕先の欠損面は滑らかで、手の部分を貼り付けていた痕跡が見られる。2本の隆帯が肩に貼付され、隆帯の脇にはそれぞれ沈線が沿っている。背面の一部が摩耗しているが、ミガキ調整が丁寧に行なわれている。色調は橙色である。焼成は良好で、胎土に石英粒を密に含む。



第8图 出土土偶实测图(3)

16はj 2グリッド出土である。中空土偶の残欠である。胴部の一部と考えられる。現存で高さ6.0cm、幅3.3cm、厚さ3.6cm、重さ41.0gを測る。上下や表裏は不明である。脇側に縦位の沈線が2条と弧を描く沈線が施文されていて、幅広で浅い沈線文を引いた後、無節L縄文を充填している。内面は丁寧にナデ調整が行なわれているが一部に輪積みと見られる痕跡が確認できる。また、はっきりとした稜をもつ丸い窪みが見られる。腹部の裏側かもしれない。焼成前の欠損が一部に見られる。無文部にはミガキの痕跡があるが、全体的に摩滅している。色調は褐灰色を呈する。焼成は非常に良好で胎土に砂粒を密に含む。

17は出土地点不明である。中空土偶の脚部残欠である。現存で高さ5.8cm、幅4.2cm、厚さ4.1cm、重さ60.8gを測る。若干がに股気味に弯曲する。横方向に3条の沈線を描き、隆帯を貼付し縦位の沈線を9条引いている。その後RL縄文を施文している。内部は輪積み痕跡がはっきりと分かる粗い調整だが、外面は丁寧にナデ調整を施している。破片の状態では自立する。隆帯の貼付けの位置、器厚が比較的薄く脚部として耐えられるか疑問である点、輪積みの順序を観察すると、足の付け根から先端に向かって製作されている、通常の中空土偶の脚部とは逆の手順となる点から、腕部の可能性も考えられる。側面に焼成前のやや広い面積の欠損がある。色調はにぶい褐色である。焼成は良好で、胎土に石英粒や砂粒を含む。

18は出土地点不明である。中実土偶の胴上半部残欠である。現存で高さ4.5cm、幅4.5、厚さ2.7cm、重さ31.7gを測る。乳房と正中線が粘土貼付けで表現され、乳房上には小さな刺突が施される。乳房の上下に横位の沈線が施され、沈線間には薄く綾杉文が確認できる。乳房の上部には横位の沈線が多数施され、正中線を切るように縦位の沈線も認められる。脇部分には、体の輪郭に沿うように2条の沈線が正中線をはさんで左右対称に施文される。沈線施文後にRL縄文が施され、沈線が一部消えかかっている箇所がある。背面の残存部にも横位の沈線と縄文が認められる。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。胎土には細かな砂粒を密に含み、小さな白粒が目立つ。本例は時期が判然としないが、本遺跡出土の筒形土偶と綾杉文、色調などが類似することから、筒形土偶と同時期の所産である可能性がある。

19は出土地点不明である。中実土偶の胴部残欠で、両腕、胴下半が欠損する。現存で高さ3.3cm、幅3.6cm、

厚さ2.0cm、重さ23.3gを測る。文様は確認できず、粘土貼付けによる乳房と正中線が認められる。乳房の先端は欠損する。色調は黒褐色を呈し、ナデによって調整される。焼成は良好で、胎土には細かな砂粒を密に含む。

20はo2グリッド出土である。中実土偶の胴下半から左脚部残欠である。現存で高さ5.3cm、幅4.6cm、厚さ1.8cm、重さ30.5gを測る。右脚を欠損するが、本来は脚を左右に広げる形態を呈する。腹部に円形の粘土粒を貼付け、背面には細い沈線が多数見られる。足裏面は円形で平坦である。色調は橙色で、ナデによる調整が見られる。焼成は良好で、胎土には細かな砂粒を密に含む。

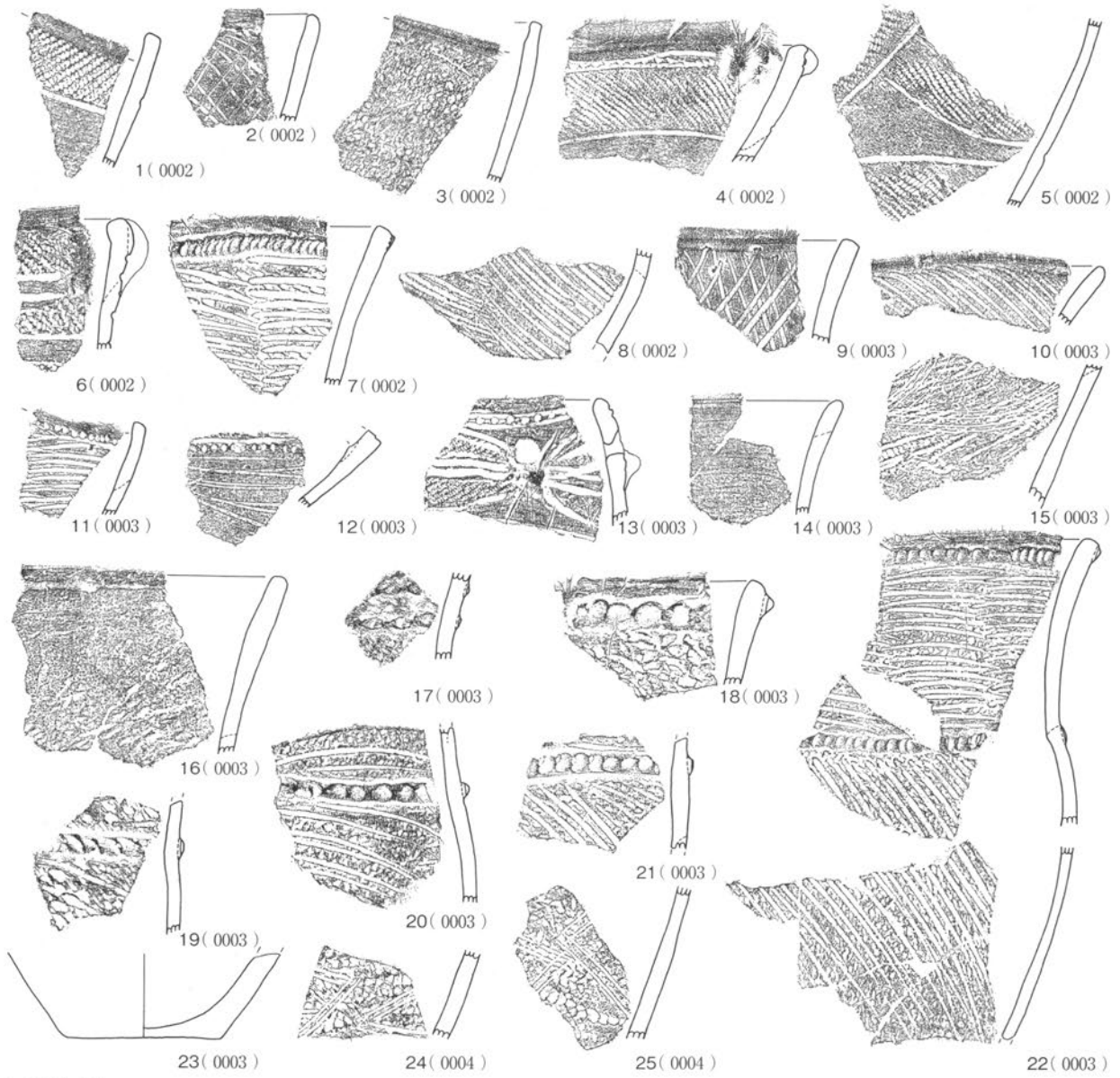
21はn2グリッド出土である。中実土偶の左脚部残欠である。現存で高さ3.8cm、幅3.6cm、厚さ4.1cm、重さ43.9gを測り、自立する。つま先がやや前方に突出し、足裏面はわずかに凹凸があるものの平坦である。文様は、背面に縦位の沈線が1条確認できるのみで、足裏面には浅いスジが見られる。色調はにぶい黄褐色を呈し、調整はミガキで、つま先などやや突出するところは指でつまむように成形している。焼成は良好である。胎土には細かな砂粒を密に含む。

22はj 3グリッド出土である。中実土偶の脚部残欠である。現存で高さ4.7cm、幅3.3cm、厚さ2.2cm、重さ36.5gを測る。表裏不明である。表面には沈線が2本引かれ、上部の沈線はごく浅く、下部のものは裏までめぐる。欠損面上部付近の表裏面に、ごく弱い盛り上がり端部が見える。これが斜め下方向に伸びる隆帯であったとしたら、肩部の破片かもしれない。焼成は良好で、胎土に砂粒と黒雲母を密に含む。粗いナデ調整が見られる。(佐布・武内)

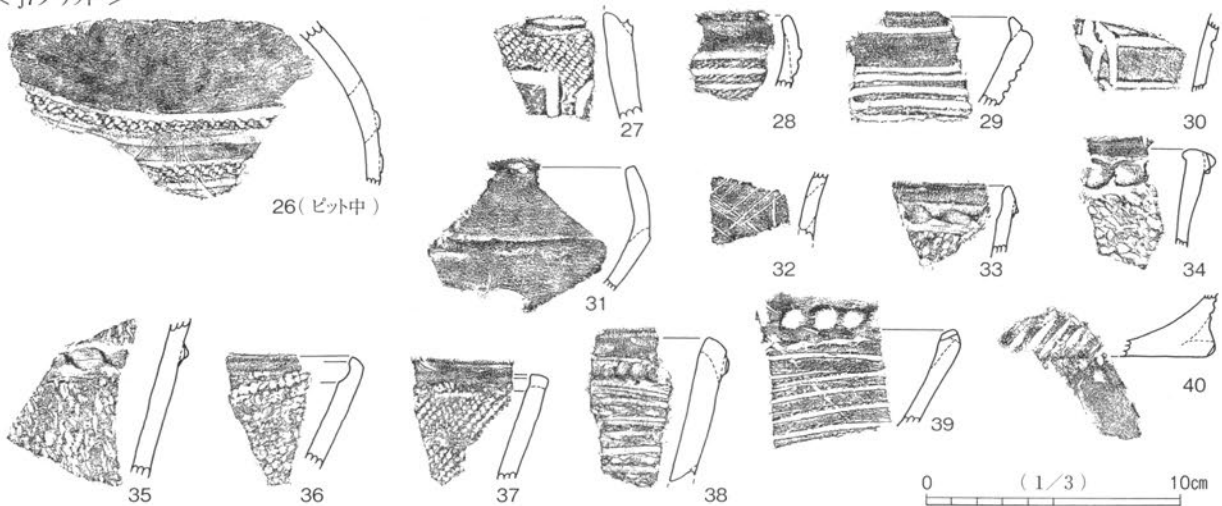
6 土偶周辺から出土した土器

現在当財団に保管されている龍角寺(竜角寺新屋遺跡)の遺物のうち、縄文土器は19箱である。しかしこれは出土した土器全てではない。トレンチを掘り始めた当初から大量の土器が出土し、調査期間および整理期間・報告書のボリュームを考えると全てを採集するのは不可能な状況であった。そこで表土から出土したものは一切採集せず、包含層および遺構中から出土したのみ採集したとのことである。そのうち出土位置が判明しているものは12箱、不明なものは7箱である。現在では機械注記が主流であるが当時は人力で注記するほかなく、古代寺院と関係のない縄文土器は優

< j8グリッド >



< j7グリッド >



第9図 出土土器(1)



第10図 出土土器(2)

先順位が低く時間切れとなって注記されなかったものと思われる。今回の整理にあたっては出土位置が判明している12箱を対象とした。

紙数の制約もあるので、ここでは土偶が出土した区域の土器の紹介を優先して行うこととする。それ以外については機会を改めて紹介したい。また、特に必要なもの以外の個別の詳細な記述は省略する。なお、遺物の注記番号はほとんどが0001であるが、グリッドによって0002から最大0007まで区別されている。当然何らかの意味があるまとまりと思われ、現場の状況から考えてピットから出土した土器を区別していた可能性が強い。が、肝心の遺物台帳が2007年12月現在所在不明なため、遺物番号と出土ピットが照合できない。ここではとりあえず番号ごとのまとまりでいずれかのピットから出土したという前提でレイアウトを行っている。遺物番号の後の（）内は、注記番号を示している。（）がないものは、注記番号が0001だったものである（第9～17図）。

<j 8グリッド>j トレンチはこの調査で唯一「盛土」を横断するようにトレンチが設定されていた。出土遺物は遺跡の状況を把握するのに重要な資料であると考えられたので、すべてのグリッドの遺物を報告対象とした。

j 8グリッドの遺物は後期中葉が圧倒的多数を占め、それ以外の時期はごく少ない。1～8には0002と注記される。5は瓢形土器の胴下半部である。9～23には0003と注記される。12はソロバン玉形土器の胴下半部である。15と16は同一個体と思われる。22の粗製深鉢は接合しない破片を図上復元したもの。0003の遺物は、もちろん例外はあるがセットになるものと思われる。このグリッドのピット群が竪穴住居跡である可能性についてはすでに触れたが、その時期を示すものといえよう。24・25は同一個体で、0004と注記されている。

<j 7グリッド>遺物の中心は後期中葉であるが、先行する後期前葉、後続する後期後葉および晩期前葉の遺物も比較的多い。26は安行1式の台付浅鉢の台部である。報告書に掲載された写真ではみみずく土偶頭部8と併伴したことが明らかになっている。帯縄文が2条巡り、外面は丁寧な調整が施されるが内面は無調整でザラザラしている。残念ながらこの土器には注記されておらず、併伴土器は不明である。なお、みみずく土偶には0002と注記されているが、同じ注記の土器はない。27～49は注記0001だったもので、包含層一括

であろうか。27は称名寺1式で、今回の調査で出土したほとんど唯一のもの。30は「ハ」の字状沈線の変形したものとみなすことが出来よう。40は太く深い沈線が施される浅鉢の底部で、後期中葉から後葉と考えられる。42は浅鉢で、下側は強く屈曲して小さな底部へすばまる器形を呈すると思われる。43は26とは別個体の台付浅鉢である。50～56は0004の注記があるもので、先のj 8グリッドの24・25と同じ地点を示すかどうかは不明。57～59は0005、60～63は0006と注記されるもの。64は0007の注記があるもの。

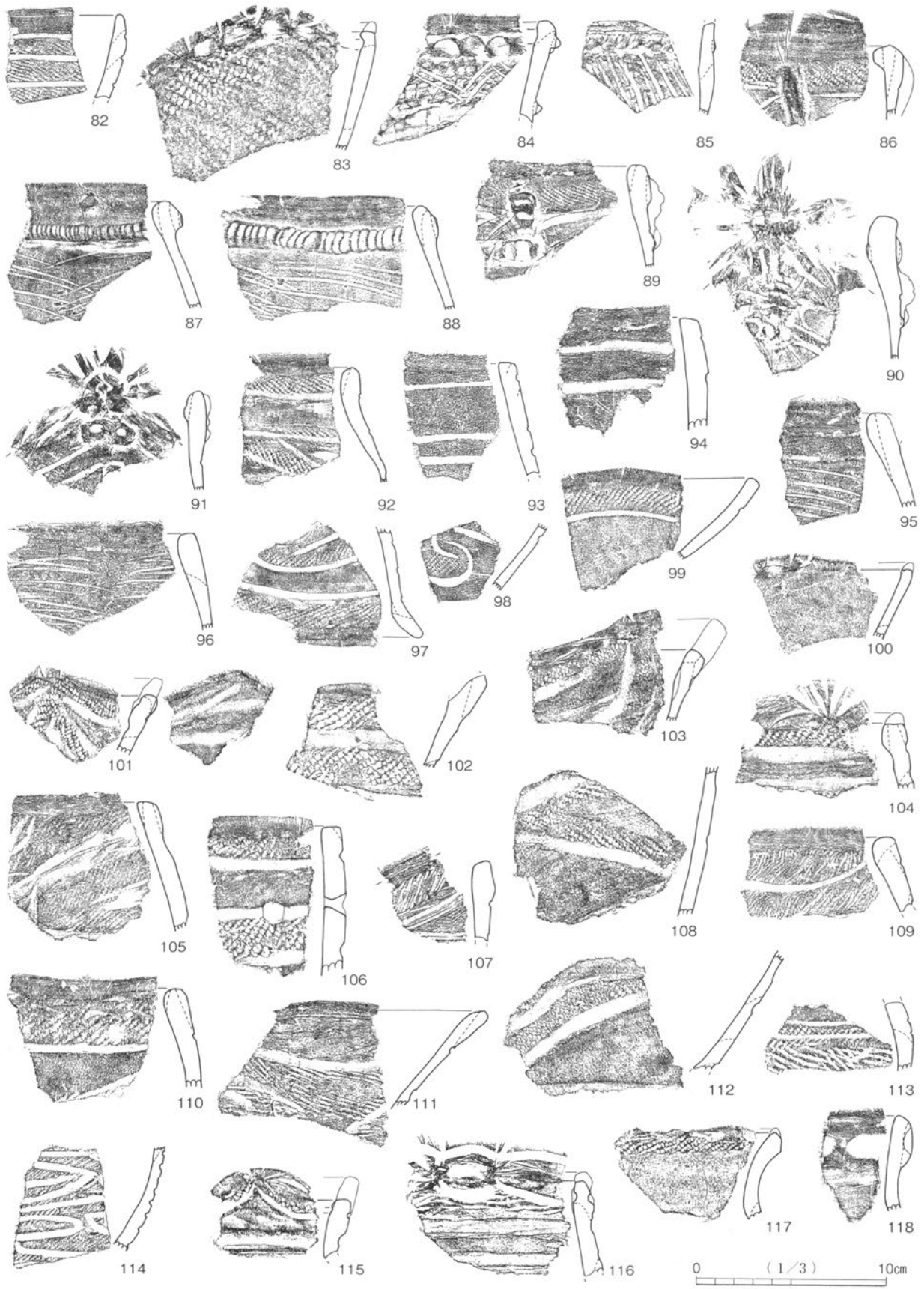
<j 6グリッド>遺構が比較的希薄で遺物もやや少なかった。時期は後期中葉から後葉が主である。65～72は0001と注記されるもの。68は2本の平行沈線が口縁部に沿う丸底の浅鉢である。69はj 8グリッドの24・25と同一個体と思われる。73～75は0002と注記されるもの。現場図面では竪穴状遺構に（0002）という番号が付けられており、そこから出土したものと思われる。この遺構の時期は後期後葉という現場の所見と一致する。74は波頂部直下の瘤が剥落する。

<j 5グリッド>道路際で調査面積が少なく、遺物も少なかった。時期は後期中葉から晩期前葉が主である。76はいわゆる区切文の退化したものと考えられる。

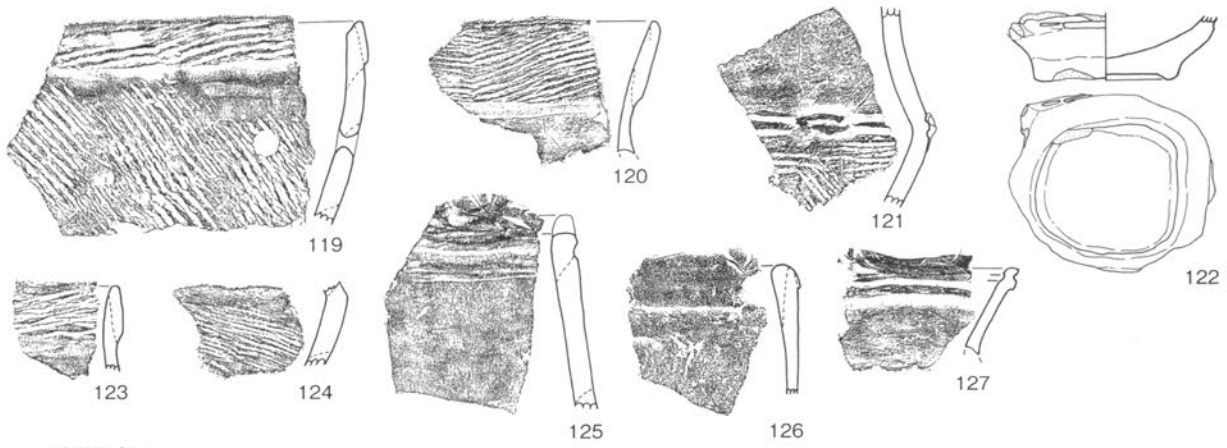
<j 4グリッド>やはり道路際で調査面積は少ないが、出土遺物は多量であった。後期中葉から晩期中葉までの土器が出土しているが、晩期の土器が大多数を占める。83は波状口縁の粗製深鉢で、波頂部に小突起が5対貼り付けられる。102は口唇部内側が剥落する。111は地文が撚糸文である。113は胴部横位の平行沈線内に縄文が充填され、その下側は撚糸文が施される。114は大洞C 2式に相当する在地系の浅鉢である。115～121・123～127は晩期中葉から後葉にかけての粗製土器ないしは無文土器各種である。116の地文は撚糸文である。117・127は広口壺形か。125の口縁部は地文条痕に見えるが不鮮明。122は方形の浅鉢で、わずかに上げ底になる。後晩期か。

<j 3グリッド>j トレンチでは最も遺物が多かった地点である。後期前葉から晩期中葉までの土器が出土しているが、晩期の土器が大多数を占める。132は釣手土器である。139は安行2式に特徴的な瘤が貼り付けられているが、それ以外は無文である。150は浅鉢の底部付近に瘤が貼り付けられているもので、胴部側は縦区画の平行沈線が配される。晩期前葉であろう。166は口唇直下に大洞系に特徴的な貼り付け隆起線が巡り、その下には安行系の渦巻き文が施される。ただ

<j4グリッド>



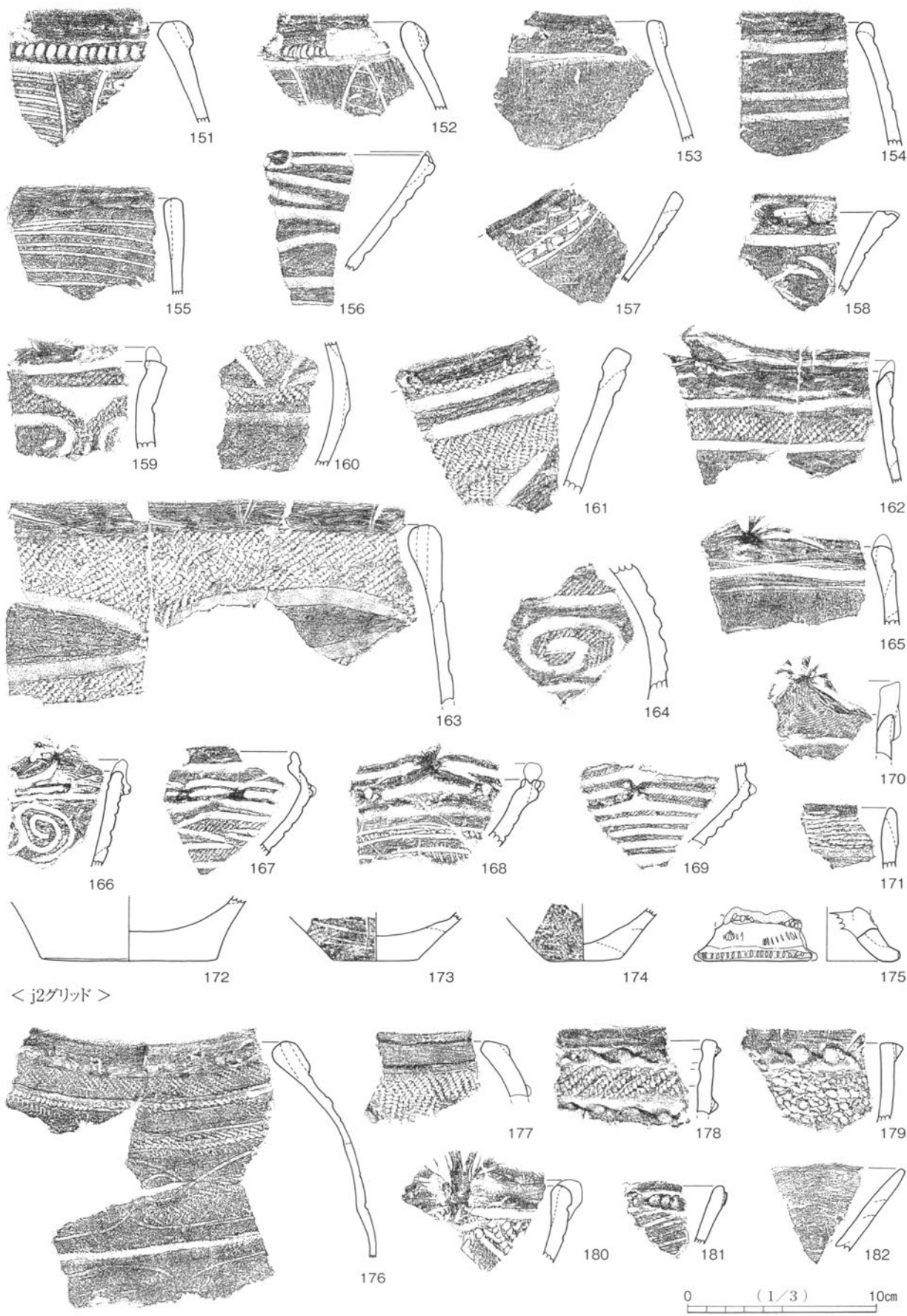
第11図 出土土器 (3)



< j3クリッド >



第12図 出土土器 (4)



第13図 出土土器 (5)



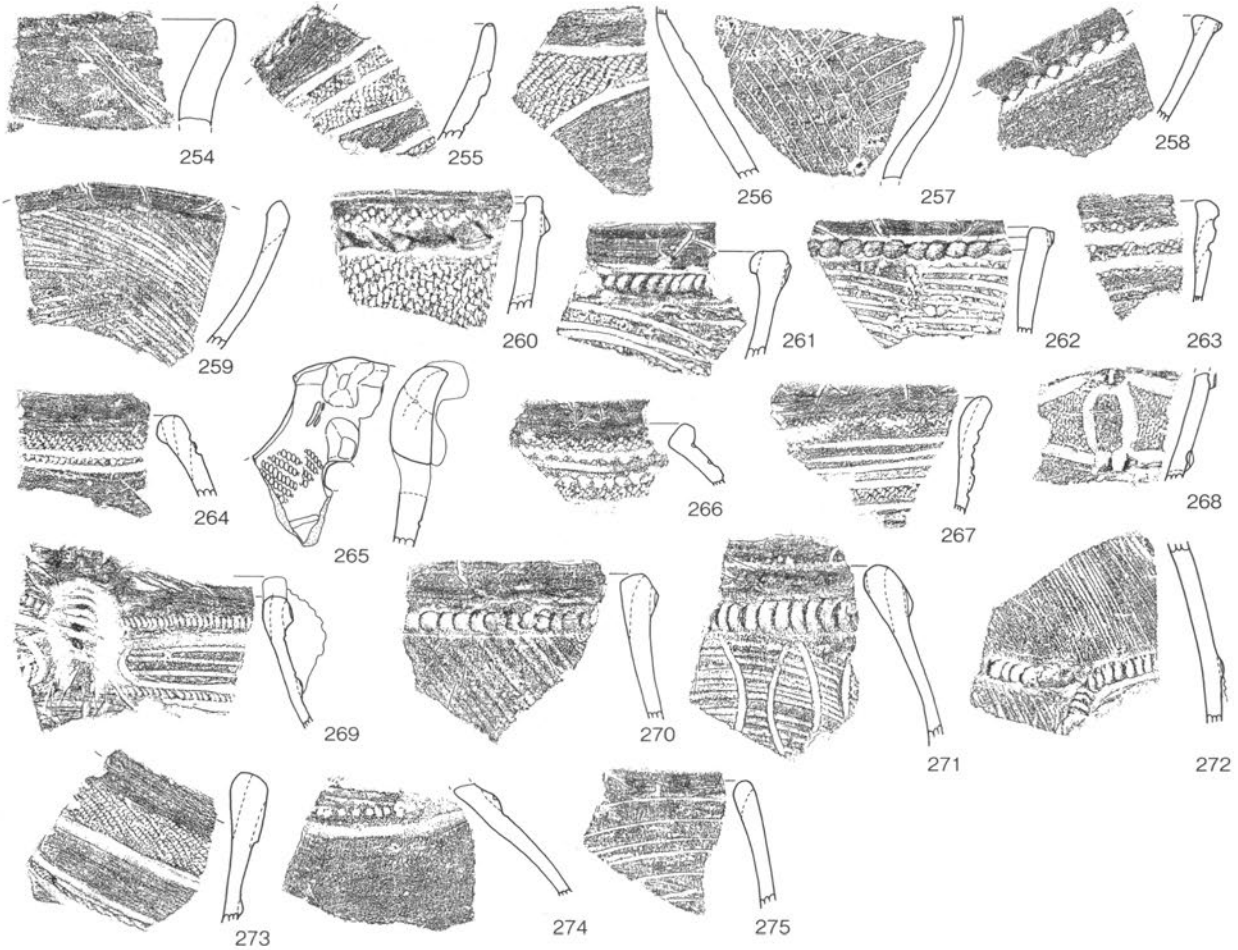
第14图 出土土器(6)

< jレリツド >

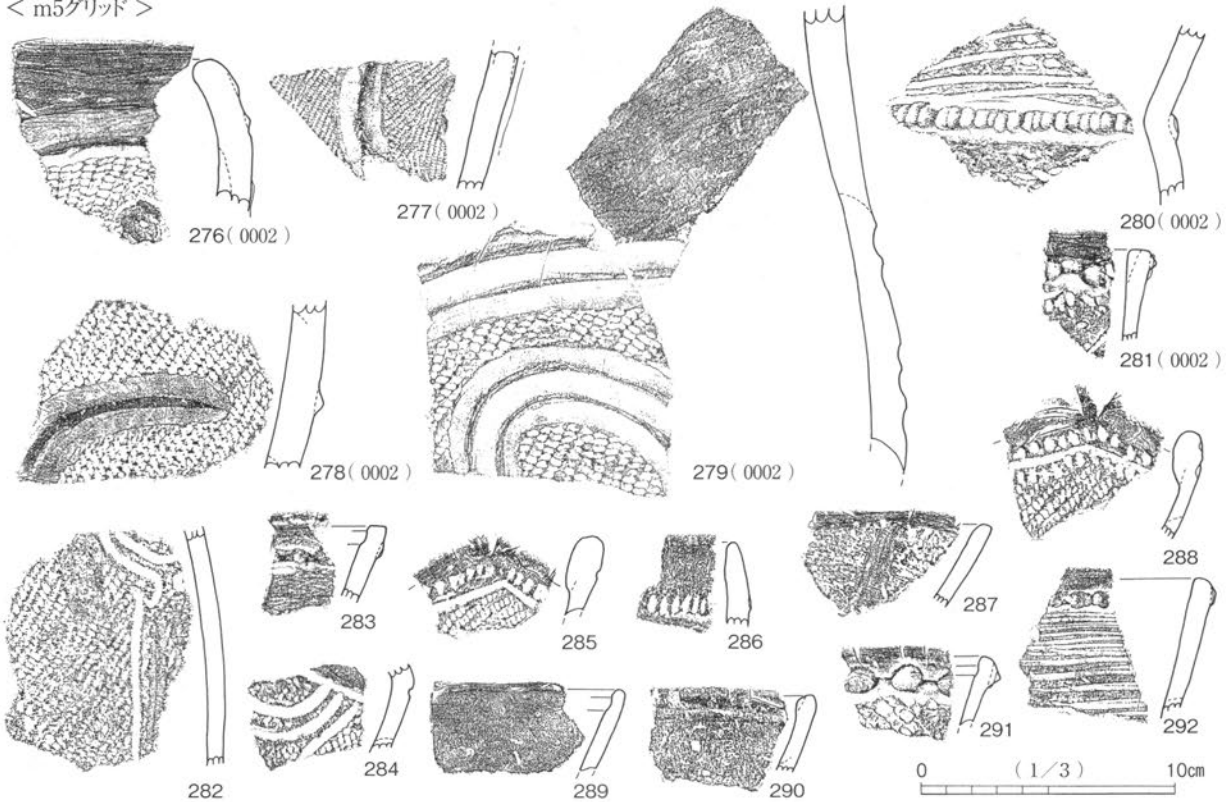


第15図 出土土器 (7)

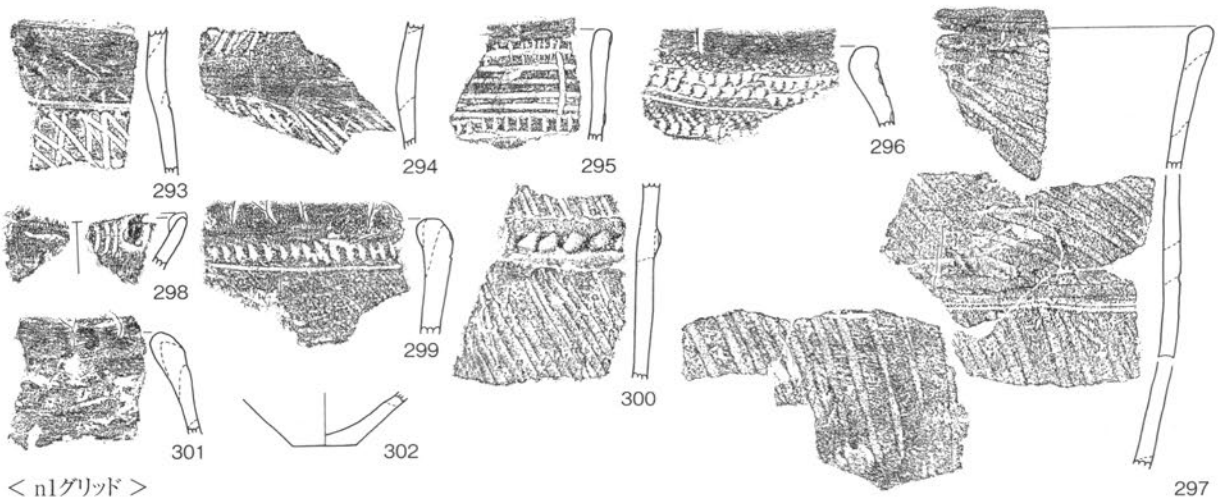
< L4グリッド >



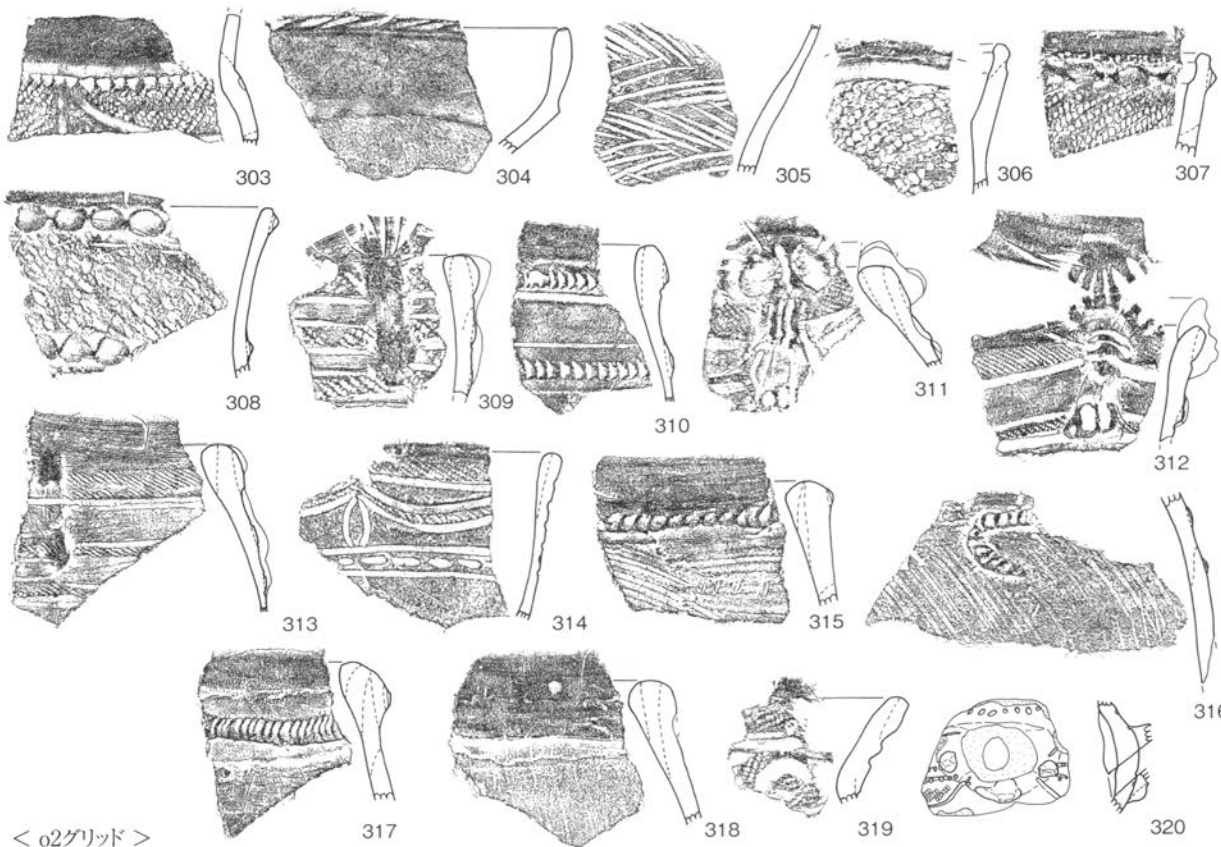
< m5グリッド >



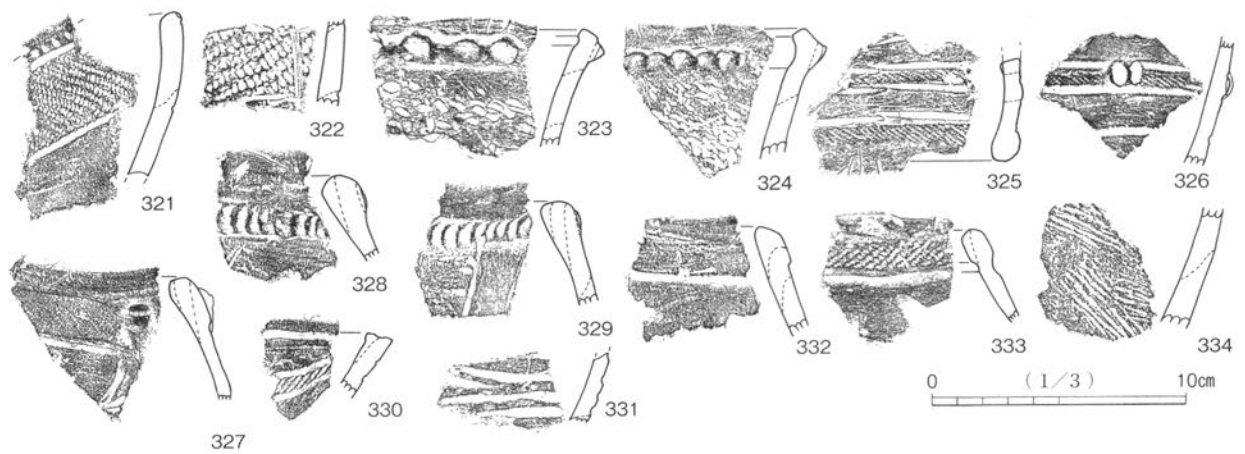
第16図 出土土器 (8)



< n1グリッド >



< o2グリッド >



0 (1/3) 10cm

第17図 出土土器 (9)

し隆起線は粘土紐に角棒状工具による沈線を加えただけの粗雑なもの。167～169は大洞C 2式に相当する在地系の浅鉢である。175は台付浅鉢もしくは異形台付土器の台部で、端部と脚取り付け部に刺突列が巡る。後期後葉から晩期初頭と考えられる。

<j 2グリッド>ここも遺物量は多かった。時期の主体は後期中葉から晩期中葉であるが、主体は後期後葉から晩期前葉になり、晩期中葉の遺物はやや減少する。177は加曾利E 4式の深鉢で「盛土」南東側ではごく少ない。182は無文の浅鉢で、調整や焼成などから後期中葉と推測した。184は折り返し口縁を持つ無文の小形深鉢で、貼り付け瘤の形状から安行1式とした。189の注口土器は注口部下の瘤と沈線の描線法から晩期前葉とみなした。209は口唇外側が剥落する。208もそうかもしれない。216は口唇が内側に肥厚する深鉢で、晩期中葉か。

<j 1グリッド>j 2グリッドに比べ遺物量は減少する。主体は後期中葉から後葉にかけてで、晩期前葉から中葉にかけての遺物が若干出土する。228は異形台付土器で、曾谷式に相当するものであろう。235は注口土器であるが口縁の貼付瘤が剥落する。241は2対の双弧状沈線間に蛇行沈線を垂下させ、その間を縄文で充填する凝った文様の粗製土器。244は口縁部が外反し、頸部との間に隆起線が巡らされるもの。晩期とみなしたが疑問も残る。246は大柄な台付浅鉢で、晩期中葉であろう。

<L 4グリッド>Lトレンチで土偶が出土したのは北西端の4グリッドだけだったので、ここではそこから出土した遺物を紹介する。時期は後期後葉が多数を占め、後期前葉から晩期前葉まで出土する。256はソロバン玉形土器の肩部である。274は壺形を呈すると考えられる土器で、肩部に隆起線が貼り付けられその上に連続刺突が施される。時期は不明。

<m 5グリッド>mトレンチではやはり北西端の5グリッドから土偶が出土したのでその遺物を紹介する。ここからの出土遺物も後期後半が多数を占め、中期後半から晩期前葉まで出土するが、中期後半の遺物が多いのが目をひく。隣のm 4グリッドには中期後半の竪穴住居跡が存在するが、m 5グリッドのピットにもその時期に所属するものがあると思われる。なお、276～281は0002の注記があるが、このグリッドでは遺構の調査は行われなかったことになっており、具体的にどこから出土したかは不明である。297は接合しない同一個体の破片を図上で復元したもの。胴部の区画沈

線は条線と区別がつかないぐらいに浅く弱い。298は口縁内側に瘤が貼り付けられる浅鉢で、沈線の描線法から安行2～3 a式と推測される。

<n 1グリッド>nトレンチでは「盛土」南東側の1・2グリッドから土偶が出土した。しかし、2グリッド出土土器は所在が確認できなかった。ここでは1グリッド出土遺物を紹介する。主体は後期後葉から晩期前葉で、後期前葉から晩期中葉まで出土する。311は注口土器で、口唇上の突起が欠損する。320も注口土器で、注口部左右に瘤が貼り付けられ、いわゆる遮光器文が配されると思われる。後期後葉であろう。

<o 2グリッド>oトレンチでは2グリッドから土偶が出土したが、中世以降の溝がほとんど全体を占めており、原位置を保っているか疑問が多い。遺物は後期中葉と晩期前葉を主体とする。331は晩期中葉から後葉にかけての浅鉢であるが、摩耗が著しい。(安井・武内)

7 小 結

総合的な検証は機会を改めるとして、今回は各トレンチ出土土器の口縁部の破片数を表で掲載し、時期と出土地点の大まかな傾向をつかむ手がかりとすることで、簡単ではあるが小結としたい(表1)^(註5)。出土した中で最も古い土器は中期後葉の加曾利E式である。遺構が確認されているものの土器の出土量の割合は少ないのは、後期以降大きく変更されたためであろうか。後期前葉、すなわち堀之内式の遺物が極めて少ないことも、この時期の千葉県内の縄文後期集落の一般的な様相からするとかなり特異である。しかし、該期の所産とみられる筒形土偶の出土は軽視できない。他の地点に遺構が存在するか、あるいは遺構が存在したものの後期中葉以降に削平された可能性を指摘しておきたい。全てのトレンチにおいて最も多くの遺物が出土するのは後期中葉から晩期前葉である。調査区の北西側はこの時期の遺構が濃密に分布しており、遺跡の中心となる時期であることは明らかである。そして晩期中葉になると、jトレンチの3・4グリッドでの出土状況が示すように、「盛土」の南東側に集中する傾向が顕著になる。少なくとも「盛土」内および谷側と、台地内部側とでは出土遺物の時期に違いが現れることを示している。ただし、これがいわゆる「環状盛土」にあたるかとなると、単純には言い切れないと思われる。先のjトレンチでは「盛土」から離れた1・2グリッドやn 1グリッドでは晩期の遺物はむしろ減

表1 出土土器口縁部グリッド別点数

トレンチ		Lトレンチ				mトレンチ				nトレンチ				jトレンチ								oトレンチ			p	計	
小グリッド		1	2	3	4	1	2	3	5	1	3	6	7	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	1		
中期	加曾利E	1	4				2	2	1		2	3		1	1												17
	中期集計	1	4	0	0	0	2	2	1	0	2	3	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17
後期前葉	称名寺1																										0
	称名寺2									1																	1
	堀之内1		2		2				2	1				1	1												9
	堀之内1深鉢以外		1																								1
	後期前葉集計	0	3	0	2	0	0	0	2	1	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
後期中葉1	堀之内2						1		3			5													3	2	14
	加曾利B1																		1						1		2
	堀2～加B1粗製	2		1	1	1				2	3			1	2	2	4	2	1	1	3				2		28
	堀2～加B1深鉢以外			1						2										1	1						5
	後期中葉1集計	2	0	2	1	1	1	0	5	5	0	5	1	2	2	4	2	1	1	5	1	0	0	6	2	2	49
後期中葉2	加曾利B2						4		3				1			2	1		1	7	3	3	1	2	2	2	28
	加曾利B3			1					1	1									1	1	5				2	1	12
	加B2～3粗製	1	3		2	1	9	2	2	2	3	19	2	7	3	5	2	4	2	13	11	1	7	3	18	1	122
	加B2～3深鉢以外				3		6		2	1	1	7		1			1		2	1	1	2	1		2	1	31
	加B2～3不明										6				1												7
	後期中葉2集計	1	3	1	5	1	19	2	8	3	5	32	3	8	4	7	4	4	6	22	20	3	11	4	24	2	200
後期後葉	曾谷				1		1		1						1						1						5
	安行1		1		6	1	5	1	5	5	3	8	2	6	10	1	3	1	2	9	1	2		2	5	7	79
	安行2				3		1	1		1	1	2		5	1	3				1							19
	曾谷～後安粗製		3		8	3	2	1	7	8	6	9	2	7	14	2	3	1	3	10		2	1	2	8	1	102
	曾谷～後安深鉢以外	1	2		3				1	1	3	4	1	1	3	3			2	2				1	1	1	29
	後期後葉集計	1	6	0	21	4	9	3	14	15	13	23	5	19	29	9	6	2	7	22	2	4	1	5	14	2	234
晩期前葉	安行3a	1	5	2	3		1	1	2	4	8	10	1		6	14	6	1		1		2	2	2	10	82	
	安行3b	2	2				1		1	7	2			1	3	3	1			1		1		2	3	30	
	晩期前葉粗製	4	2	3	2		3	4	2	2	10	6	2	2	15	21	11	2		5		3	7	7	13	126	
	晩期前葉深鉢以外		1				1	1	1	5					3	2	7	1		2		1	1	1	3	30	
	晩期前葉集計	7	10	5	5	0	4	7	5	8	30	18	3	3	27	40	25	4	0	9	0	7	10	12	29	2	268
晩期中葉	安行3c										1																1
	安行3d																										0
	前浦						1	4					1	3	6	17	14					1	2	2	5	1	56
	晩期中葉粗製		1						1		1			1	1	2	7										14
	晩期中葉深鉢以外								1	1				1	2	1	2					2					10
	大洞C1・C2									2						6	3										11
	晩期中葉不明														1												1
	晩期中葉集計	0	1	0	0	0	1	5	0	1	5	0	1	5	10	26	26	0	0	0	0	3	2	2	5	1	93
	不明										9				2	2				1	3		1				18
	総計	12	27	8	34	6	36	19	35	33	56	90	13	39	75	89	63	11	14	59	26	17	25	29	74	2	890

* m4・n2・n8・p2・p3は所在不明。

少する。一定の集中域は認められるが、いわゆる「中央窪地＝晩期包含層」といった図式が成立するほどの規模で発達しているとは思われない。このような状況を分析するには今回報告した調査成果だけでなく、遺跡エリア内の地形や遺物の散布状況などを多角的に検討する必要がある。この点については機会を改めてより詳しく検証したい。(安井)

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、調査を担当された大原正義氏には今回の資料化を快諾していただいたほか、調査の状況や出土遺物について数々の御教示を賜った。その他、以下の方々にお世話になった。記して謝意を表します。

青木正規、阿部芳郎、金関 恕、土肥 孝、西川博孝、

注

- 1) 「龍角寺」と「竜角寺」の使い分けは、千葉県埋蔵文化財分布地図上の呼称に依った。寺院本体は「龍角寺」、字名は「竜角寺」そして周辺遺跡群名は「竜角寺遺跡群」が正規の呼称である。ただし1988年の調査では「龍角寺」の名称を使用しているため、この調査に関わる事柄は「龍角寺」に統一して表記している。
- 2) この文献は1927年に刊行されたものであるが、残念ながら実物を閲覧することが出来なかった。以下のウェブ上の電子アーカイブを参考にした。
<http://www.shimogo-kyosaikai.org/bunkazai/doki/doki.htm>
- 3) ちなみに江坂氏によるこの著名な文献では、出土物が「龍腹寺」と誤って記載されている。所在地についても初版では「本埜村」となっているが、1967年に刊行された再版では「もとの」と訂正されているが、結果的には初版のルビが正しかったことになる(栄町は1955年に安食町と布鎌村が合併して誕生した。龍角寺は合併前の安食町に所在していた)。この誤記はその後多くの「犠牲者」を生んだ。代表的なものとして、(堀越 1980) (埼玉考古学会編 1992) など。ちなみに現在の本埜村龍腹寺周辺は、縄文時代の遺跡とは周知されていない。
- 4) トレンチ名称はアルファベット小文字を使用していたが、小文字の“l”は数字の“1”と混同されやすいので、本稿では大文字の“L”を使用する。
- 5) 分類は精製深鉢、粗製深鉢、それ以外で区分したが、ソロバン玉形や壺形などは精製深鉢に含めている。

挿図・写真引用文献

- 第1図 国土地理院発行1/25,000地形図「成田」「下総滑川」に加筆
第2図 栄町発行1/2,500基本図に加筆
第3図 大原正義 1989『栄町龍角寺確認調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
写真 財団法人辰馬考古資料館編 1979『1979年秋季展 東日本の縄文文化』財団法人辰馬考古資料館

参考文献

- 阿部芳郎 2005『遺丘集落の類型化と後晩期の遺跡群』『環状盛土遺構』研究の到達点予稿集』「馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム」実行委員会
石田廣美・横山 仁他 1985『主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅地関連事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
石戸啓夫他 1991『千葉県印旛郡栄町龍角寺尾上遺跡・龍角寺谷田川遺跡一栄町総合レジャークラブ開発事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)』財団法人印旛郡市文化財センター
茨城県立歴史館編 1994『特別展 東国の土偶』茨城県立歴史館
植木 弘 1993『安行期土偶の研究その1—山形土偶系統と遮光器土偶系統の展開—』『埼玉考古第30号』埼玉考古学会
宇田敦司・松田富美子 1997『千葉県成田市南羽鳥遺跡群Ⅱ 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)一南羽鳥中岫第1遺跡A・B・C・D・E・G地

- 点一』財団法人印旛郡市文化財センター
江坂輝彌 1960『土偶』校倉書房
大野一郎 1926『下総常陸国石器時代遺蹟地名表』考古学雑誌 16-3
大野康夫 1987『栄町植生郡街跡確認調査報告書Ⅱ』財団法人千葉県文化財センター
大原正義 1989『栄町龍角寺確認調査報告書』財団法人千葉県文化財センター
喜多裕明 2003『栄町埋蔵文化財集報—平成13年度—』栄町教育委員会
越川敏夫他 1982『龍角寺ニュータウン遺跡群—龍角寺ニュータウン遺跡調査報告書—』龍角寺ニュータウン遺跡調査会
小林清隆 1985『栄町大畑Ⅰ-2遺跡—県単道路成田安食線埋蔵文化財調査報告書—』財団法人千葉県文化財センター
小牧美枝枝他 1994『千葉県印旛郡栄町大畑Ⅰ-3遺跡—栄町ガソリンスタンド建設予定地内埋蔵文化財調査報告—』財団法人印旛郡市文化財センター
埼玉考古学会編 1992『シンポジウム縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶型式の出会い—』埼玉考古学会
財団法人印旛郡市文化財センター編 1987『財団法人印旛郡市文化財センター年報3—昭和61年度—』財団法人印旛郡市文化財センター
財団法人印旛郡市文化財センター編 1988『財団法人印旛郡市文化財センター年報4—昭和62年度—』財団法人印旛郡市文化財センター
財団法人印旛郡市文化財センター編 1989『財団法人印旛郡市文化財センター年報5—昭和63年度—』財団法人印旛郡市文化財センター
財団法人印旛郡市文化財センター編 1990『財団法人印旛郡市文化財センター年報6—平成元年度—』財団法人印旛郡市文化財センター
財団法人辰馬考古資料館編 1979『1979年秋季展 東日本の縄文文化』財団法人辰馬考古資料館
財団法人辰馬考古資料館編 1988『考古資料図録』財団法人辰馬考古資料館
栄町教育委員会 1992『千葉県印旛郡栄町埋蔵文化財分布地図』栄町教育委員会
杉山博久 1999『魔道に魅入られた男たち—揺籃期の考古学界—』雄山閣出版
東京帝国大学 1928『日本石器時代遺物発見地名表(第五版)』東京帝国大学
中山俊之・喜多裕明 2006『栄町大畑Ⅰ-4遺跡—不特定遺跡(大畑Ⅰ-4遺跡)発掘調査委託事業—』財団法人印旛郡市文化財センター・栄町教育委員会
野口義磨他 1964『日本原始美術2 土偶・装身具』講談社
橋本 勉 1990『蓮田市雅楽谷遺跡 県立蓮田養護学校関係埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
堀越正行 1980『千葉県の土偶』市立市川博物館
宮 文子 1991『千葉県印旛郡栄町敷内遺跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター
吉林昌寿 2003『千葉県印旛郡栄町宮前遺跡—不特定遺跡(向台・宮前遺跡)—』栄町
米田幸雄他 1987『大畑Ⅱ遺跡—栄町龍角寺ドライブイン建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—』財団法人印旛郡市文化財センター